魔王子は世界を救い勇者となる

Lenbird

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王子は世界を救い勇者となる

【Ｎコード】
Ｎ８９５０Ｖ

【作者名】
Ｌｅｎｂｉｒｄ

【あらすじ】
――かつて妖精と人間は互いに手を取り合い共存していた。だが、妖精と人間の中は段々悪くなり最終的には戦争まで発展した。
その結果、人間の支配する世界が出来上がり、妖精は国外追放、魔族はもはや獣と同じ扱いを受け奴隷にされたりしている。
そして、一人の姫と一人の魔王子が出会う時物語ははじまる――

ブログ始めましたＵＲＬはｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｐｏｋｅｍｏｎｂｗ｜ｒｉｏ

人物紹介

フィア・フロスト・・・・・・ノームの岩戸に閉じ込められていた妖精の少女。フロスト王国の姫。１０年前に起こった戦争に巻き込まれ帝国アルフヘイムの魔導師にノームの岩戸に封印をかけられてしまう。
特徴：蒼い髪にポニーテール、エメラルドグリーンの瞳、目つきが鋭い、身長が低い、しゃべり方が偉そう。
好きなもの：綺麗なもの
嫌いなもの：熱いものと場所

オーガ・ザントマン・・・・・・帝都アルフヘイム出身の少年。腕っ節は強くその実力は帝国の近衛隊に選ばれる程だったが、魔王の息子だったことがバレてしまい帝国に追われる身となる。
特徴：ボサボサの黒髪、蒼い瞳、八重歯、戦闘時以外は常にだるそうにしている。魔魂召喚した時は肌が全身赤くなり、額から角が生え、猛獣のような瞳になる。
好きなもの：武器、戦闘、ケフィア
嫌いなもの：面倒事

クララ・オクタス・・・・・・フィアの使い魔。岩戸から出ることができないフィアの代りに物資の調達など身の回りの世話をしている。クラーケンとスキュラのハーフなのでタコ足とイカ足の両方を持つ。
特徴：メイド服、五本ずつイカ足とタコ足が生えている（生やそうと思えばもっと生やせる）、茶髪にロングヘアーで髪も触手の様に動かせる。
好きなもの：紅茶、人をからかうこと
嫌いなもの：海

プロローグ

夜も更けあたりも真っ暗でほとんど見えないような街を俺とおっさんは走っている。

「おい、追手の数が多すぎる。このままじゃ逃げ切れねぇぞ！」

「仕方があるまい。二手に分かれるぞ」

「ああ、わかった」

「魔導兵は恐らくお前の方を追うだろう、近衛兵は俺が引き受ける」

「分かった、合流場所は国境付近でいいか？」

「ああ、そこがいいだろう」

そして、おっさんは懐（ふところ）から何か取り出し俺に向かって投げた。

「これを持っていてくれないか？」

「これは？」

「お前が持つべきものだ。だが、それを一度使うとお前は力に呑まれるかもしれない。だからなるべくそれは使わないようにしろ」

それは、紫色の魔魂水晶（まごんすいしょう）だった。

「国境付近でまた会おう！」

そう、それが俺の見たおっさんの最後の姿だった。

「くそ、しつけーぞ！」

「悪いねぇ～これがあたしたち魔導兵の仕事だからさ～」

おっさんと別れた後、俺は一人の魔導兵に追われていた。

「ま、元同僚のよしみで逃がしてあげたいんだけどねぇ～。そんなことするとあたしが痛い目見ちゃうんだよ～」

軽い口調で話しかけてくるこいつは魔導兵の実力者で炎を操り空を飛ぶことができる。だから、丸腰で逃げるのに精一杯の俺には勝てる相手じゃない。

「悪いが俺は元近衛兵だ！同僚じゃねぇ」

「かったいこと言わないでさ～」

そして口元を歪ませて言う。

「早く殺されてよ」

ドオォォォォン！！！

思いっきり火の玉をぶん投げてきやがった。

「ぐあぁぁぁぁぁ！」

そして、薄れ行く意識の中。

「……ぬなよオーガ」

あいつが何か言っていたがよく聞こえなかった。

第一話　岩戸の姫とメイド

ここは人間の支配する帝国アルフヘイムの国境付近にあるノームの岩戸だ。

「はあぁぁぁぁ……」

退屈だ。

「どうなさいました姫（笑）？」

「……クララ、そなたは私を怒らせたいのか？」

「滅相もございません。わたくしはただ姫（笑）のムスッとした顔が見たいだけでございますよ。」

「もうよい……そなたの相手は疲れる魔魂水晶に戻っておれ」

「承知しました。」

そう言うとクララは私の首にかけてあるペンダントの水晶に戻って行った。

「まったく、いつまでこのような者と暮さねばならぬのか……」

ガサッ！私が溜め息をつくと同時に物音がした。

「クララ、今物音が聞こえんかったか？」

「えぇ、誰かいるのでしょうか」
クララは慌てて魔魂水晶から出てきた。
「見に行ってみるか」
岩戸の結界の張ってあるギリギリの所まで行くと――
「む、誰か倒れておるぞ」
――傷だらけでボロ雑巾のようになった少年が倒れていた。
「あらまぁ、凄い怪我ですわ。兵隊とでもやりあったのかしら？」
「とにかく手当てをせねばならん。クララ、私は外に出ることは出来ぬ。頼んだぞ」
「岩戸の中に引きずりこめばよいのですね、かしこまりました」
そう言うとクララは何十本もある足で倒れている少年を岩戸の中へ文字通り引きずり込んだ。
「大怪我をしている者をそのように扱うのどうかと思うがな……」
「これでも丁重に扱っている方ですよ？」
ケロッとした顔で答えるクララに私はまた溜め息をついた。
「この傷は……」

少年には帝国の魔導兵から受けたと思わしき魔導傷がついていた。

「治癒魔法で魔導傷を取り除かなければ確実にこの男、死んでしまいますわよ」

「だが私は治癒魔法は使えぬぞ？」

「ご安心ください姫（笑）。この【サイクロプスでもわかる治癒魔法（爆）】を読めば姫（笑）でも治癒魔法を使うことが出来ますわ」

「……本の題名には突っ込まんが、とりあえず試してみるか。……えーと、体内の魔力（マナ）を手に集中させ、一気に解き放つ！」

ドォン！と物凄い轟音がして目の前を見てみると少年が黒焦げになっていた。

「あらまぁ、力の加減を間違えてしまったようですね姫（爆）」

「わ、笑い事ではない！」

慌てて少年を揺すると急に目が開いた。

「きゃぁぁぁぁ！」

「痛っ……。ん、誰だあんたら？」

「な、なぜあれだけの傷を負っているのにケロッとしておるのだ！」

「しかも怪我のほとんどは姫（笑）の治癒魔法（爆）による火傷ですしね」

「あー傷ならほとんど治ってるから問題ねぇぞ？」

「何をバカなことを言って――治っとる！？」

「俺は生まれつき怪我の治りが早ぇんだよ。魔導傷さえなければな」

つまり私が魔力全開でこやつを吹っ飛ばしたことが原因で魔導傷が剥がれたというわけか。そう言えは何でこやつは魔導兵に追われておったのだ？

＊

気がつくと俺は見たこともない部屋に寝転がっていた。どうやら、俺を魔導兵からかくまって治療（？）までしてくれたようだ。

「そう言えばそなたの名は何と申すのだ？」

「俺か？俺の名前はオーガ。オーガ・ザントマンだ」

「私はフィア・フロストと申す。隣におるのが使い魔の――」

「クララ・オクタスです」

さっきからやけに偉そうなしゃべり方をして蒼い髪を後ろでくくり、翠玉の様な瞳で鋭い目つきをしたちっちゃい少女はフィアというらしい。んで隣に立っているタコだかイカだかわかんねぇ足をした――いや、強いて言うならタコの様な足が5本、イカの様な足が5本という奇妙な体をしたメイドがクララというらしいな。

「あんた、見たところ魔族のようだがスキュラかクラーケンどっちなんだ？」

「わたくしは父がクラーケン、母がスキュラという家庭に生まれたのでございますよ」

「ああ、なるほどそういうことか」

俺がクララの見た目に納得しているとフィアが話しかけてきた。

「オーガ、そなたはなぜ魔導兵に追われていたのだ？」

「あー、まー、いろいろあってだな……」

さすがに帝国でお尋ね者になったから逃げてきたとは言えまい。

「それよりフィアは何でこんなところに住んでるんだ？ノームの岩戸は帝国が昔封鎖したはずだが……」

「強引に話をそらしおって……まあよい、ノームの岩戸が封鎖となった理由は知っておるか？」

ノームの岩戸が封鎖になった理由は確か――

「昔、妖精と人間が戦争をしてた時に妖精の姫が封印されたからだったよな？」

「うむ、その姫は私だ」

「ああ、なるほど。だからノームの岩戸に――ってマジで！？」

「マジだ」

「まあ、封印されたのは5歳の頃ですから使い魔の私がここまで育てたのでございますよ」

となるとクララはフィアの面倒を十年間見てきたのか。

「ん？封印ってことはどうやって外の情報とか物資を集めるんだ？」

「わたくしは外に出られるのでございますよ」

だから俺を中に入れることが出来たのか。

「それにここではワルードネットもつながっておるからの」

ワルードネットって言えば確か魔法で世界中の人と情報がやり取りできるシステムのことだったな。

「つまり、封印された割には結構楽しく暮らしてきたってわけか」

俺がそう言うとフィアは遠い目をして言った。

「確かに物には困らんし、情報もネットを通じて入ってくる。だがやはり私も外に出てみたいのだ……」

「無理やり封印をぶっ壊せねぇのか？」

「それが出来ればとうの昔にやっておる」

そうゆうことなら――
「俺が壊してやろうか？」
「「はい？」」
「いや、だから俺が壊すって言ってんだよ」
「いや、たぶん無理だと思うのだが……」
「まあ、連れて行ってみてはどうですか姫（笑）？」
「むう……無駄だと思うが物は試しだな」
「んじゃ、行くか」
そんでもって俺達は結界ギリギリのところにやって来た。
「んじゃいくぞ！」
俺は結界の中心らしき文字の書いてある岩の扉を殴り飛ばした。
バゴッ！という音がしたと思ったら――
ビリビリビリッ！！！

「ぐあぁぁぁぁ！」

「言わんこっちゃない……」

「ですがこの結界の魔法陣が描いてある分厚い岩戸を凹ましたのは称賛に値します」

なぜか褒められた気がしねぇ。

「しゃーねぇな……」

俺はポケットから魔魂水晶を取り出した。

「っ！その水晶は！」

フィアが何か俺の魔魂水晶を見て驚いたが俺はもう魔魂召喚を始めていた。

「本当はおっさんにはなるべく使うなって言われてたんだけどな！」

ドォン！

「な、何だ？」

「あらまぁ……」

俺の目の前にあった岩戸は綺麗さっぱりなくなっていた。

「ん？水晶はどこ行った？」

握っていた魔魂水晶がなくなっていたからどこへ行ったか探していると体に違和感を覚えた。

「俺ってこんな肌赤かったか？」

「……オーガ、そなたは一体？」

そう言いつつ魔法で氷の鏡を作って俺の前に置いた。

「何だこれ？」

そこに映っていたのは額に角が生え、肌が全身赤色に染まり、牙がむき出しになり、獰猛な虎の様な目をしている俺がいた。

「どうやらさっきの魔魂水晶は封印した力を解き放つもののようですね」

「何か知っているのか？」

「何か知っているのはわたくしではなく姫（笑）ですが」

「まさか、そんなバカな、いやそんなはずは……」

肝心のフィアは完全にパニクっていた。

「おい、フィア大丈夫か？」
そう言いながら俺がフィアの肩を揺すると――
「いやぁぁぁぁぁぁ！」

ドォン！！！

――思いっきり吹っ飛ばされた。

＊

俺は夢（もしくは走馬灯）を見ていた。
「せいっ！やっ！はっ！」
こじんまりとした定食屋の庭に響く小気味よい素振りの音。ただし振っているのは普通の人間では持つこともできないであろう巨大な斧だ。
「おーいオーガ、そろそろご飯にするぞーい」
「ああ、今行く」

そう言って俺は庭に巨大な斧を突き刺して食堂に向かった。

「あ～腹減った――ってまた来てんのかよおっさん」

「おうオーガ！相変わらずここの飯はうめぇなぁ」

この髭もじゃで汚い格好をしたおっさんは俺がこの家に来た時には住み着いてた居候だ。仕事はしているわけではなく、たまにどこかへ行ったかと思うとふらっと帰ってくる。要するにただのごくつぶしだ。

「いい加減働けっつーの！コビーも甘やかすなよ」

「そう硬いことを言うなオーガ。バックには昔助けてもらったんじゃからただ飯くらい食わせてあげなさい」

定食屋の主人であり自分の育ての親であるコビーに笑顔でそう言われると俺は何も言えなかった。

「ま、そういうこった。ケチケチすんなよオーガ！」

「お前が言うな！」

そして米を咀嚼（そしゃく）し、味噌汁を胃に流し込み、両手を合わせごちそうさまをした俺は庭に刺さってる斧を引き抜いて背中の鞘に入れた。

「いつも思うんだがその斧はどういう仕組みになってるんだ？」

「鞘に入るときは勝手に棒きれサイズまで縮むんだよ」

「どこへ行くんだ？」
「決まってんだろ？」
俺は呆れ顔で言った。
「仕事だよ。あんたと違ってな」
「ハッハッハ、こいつは手厳しい！」
「オーガ、気をつけるんだぞーい」
――やめろ
「ああ、行ってくる」
――行くな！
「うあぁぁぁぁ！」
「きゃぁぁぁぁ！」
俺が目を覚ますと目の前にフィアがいた。
「オーガ！お、驚かすでない！」
「悪ぃ悪ぃ、ちょっと悪い夢を見てた」
しかしこいつは俺が来てから悲鳴ばっか上げてるな。

「かなりうなされていたぞ、大丈夫なのか？」

「ああ、問題ねぇ。それより、あの後俺はどうなったんだ？」

俺はフィアに吹っ飛ばされたあたりから記憶が飛んでるからな。

「あの後、オーガの体が元に戻ったからクララに頼んで布団を出してもらいそこで休んでもらったのだ」

「そう言えば体も元に戻ってるな。何だったんだありゃ？」

「それについてはわたくしが説明いたしましょう」

「うおっ！？」

急にフィアの魔魂水晶からクララが出てきた。

「わたくしが思うに魔魂水晶はあなたの体内に取り込まれたのではないかと」

「魔魂水晶が俺の体内に？」

「ええ、恐らくは。魔魂水晶は魔獣や魔人の魔力をとりこみ召喚者の魔力と連動して魔魂召喚を行うためのものです。つまり、魔魂水晶に封印されている魔力が召喚者本人のものだった場合――」

「――魔魂水晶ごと体内に吸収されるというわけか」

「まあ、そんなところです。ですが私が気になっているのはそこではありません」

何か言いたそうな顔でクララはフィアの方を見た。

「むう……言いたいことがあるのならば早く言えばいいだろう」

「姫（笑）はあの魔魂水晶について何か知っているのではないですか？」

フィアは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「……昔、父上がその水晶を持っておったのだ。親友から預かったものだと言ってな」

「お前の親父が？」

「ああ、当時妖精の王だった父上は他の王とも仲が良くてな。人間の王や魔族の王とよく酒を飲んでいたそうなのだ」

魔族の王ってまさか――

「あの魔魂水晶は魔王から預かったものらしいのだ」

「……なるほどな」

「オーガそなたはもしや――」

「――ああ、俺は魔王の息子だ」

まあ、俺もつい最近知ったんだがな。

「まあ、魔王様のご子息だったのですか」

……何かクララが普段の十割増しぐらい目を輝かせてるんだが。

「言っとくが俺は魔王の息子だって自覚はねぇよ」

「いえいえ、それでもあなたが魔王のご子息ということに変わりはありません！これからは尊敬の意をこめて王子（仮）と呼ばせていただきます！」

王子（仮）って……。

「なあ、こいつ本当に俺のこと尊敬してるのか？」

「気にするでない、こやつにしてはかなり尊敬しているほうだ。私なんて（笑）だぞ」

……なるほど、そう言われてみれば尊敬されている気が――

「するわけあるか！」

「まあ、落ち着け。それよりまずいことになっておる」

まずいこと？

「どうなさいました姫（笑）？」

「5、6人の兵隊がこちらに向かっているようなのだ」

「何でわかるんだ？」

「私は広範囲にわたり生命の動きが見えるのだ」

生命の動き？それじゃあ、森にすむ小動物も感知しちまうと思うんだが……。

「姫（笑）はその生命の感情や形も見ることが出来るのですよ」

「つまり慧眼持ちってことか」

「そうゆうことになりますね」

そいつは逃走中の俺にはありがたい。

「クララ、荷物を取ってくれ」

「かしこまりました」

そう言ってクララは小型のリュックをフィアの方へ放り投げた。

「こちらは王子（仮）の荷物でございます」

今度は俺の方にポシェットを放り投げてきた。

「これは？」

「旅をするのに最低限必要なものは入れておきました」

「では行くぞオーガ」

「は？どこへ？」

俺がポカーンとしているとフィアがむすっとした顔で言った。

「そなたが私を出してくれたんじゃ、そなたが旅に同行するのは当然なのだ」

「えぇぇぇぇ……」

「それにそなたは帝国から追われている身だ。私も岩戸から出たら同じであろう？ならば同行しても問題あるまい」

まあ、そうなんだけどさぁ……。

「いいのか？」

「無論だ。オーガ、私を外の世界へ連れて行ってくれ」

まったく――

「世話の焼けるお姫様だなぁ！」

そして、俺とフィア（あとクララもか）の冒険ははじまった。

第一話　岩戸の姫とメイド（後書き）

どうもＬｅｎｂｉｒｄです。小説を投稿するのは初めてだったのですが、以前から趣味で描いたものが溜まっていたので試しに投稿してみました。この物語は一番新しく書いたものなので続きがどうなるかは僕もわかりません（笑）

第二話　大河アマゾネス

「オーガ、あとどのぐらい歩けば街に着くのだ？」

「ここから一番近い町は……インディ村が一番近いな」

近いという単語に敏感に反応して目をキラキラさせながらフィアは聞いてきた。

「近いのか！それはどのくらいの近さだ！」

「お、落ち着け！一番近いって言っただけで距離で言えば２０キロはあるぞ」

「に、２０キロだと！？そんなに歩けるわけがないであろう！？」

「……お前体力ねぇなぁ」

ま、１０年もニート生活してたんじゃ仕方がねぇか……。

フィアと旅に出て（まだ1キロも歩いていないが）分かったことがある。まず、フィアは体力がないこれはさっきも言った事情があるから仕方がない。で、問題なのは物凄くわがままなことだ。一体クララはどんな育て方をしたんだ……。

「なぁオーガ、おぶってくれないか？」

「お前……さっきからそれ何度目だよ……」

ちなみに大切なことだからもう一度言うがまだ1キロも歩いてい

ない。

（ぷっ……くくく……）

「おい、笑い声が魔魂水晶から漏れてるぞ」

クララは俺がフィアで苦労しているのが楽しいのかさっきからこの調子だしな。しかも旅に出てからは自立を促すためという口実をもとにフィアの世話を放棄しやがった。

「なぁオーガ何とか歩かないで前に進む方向はないかの～」

「あったら俺が聞きたいね」

俺が呆れていると急にフィアの耳がピクッと動いた。

「む、何か向こうから人が飛んでくるぞ」

「はぁ？人が飛ぶわけ――まさか！？」

人が飛ぶって言ったらあいつしかいねぇじゃねぇか！

「フィア！その飛んでるやつはどこら辺だ！」

「むう……かなり遠いがものすごいスピードでこっちに飛んで来とるぞ」

こうなったらもう逃げるしかないねぇな。

「フィア俺の背中に乗れ」

「む？」

「さっきおんぶしろって何回も言ってただろうが！」

「オーガおぶってくれるのか？」

何でこいつはこんなに嬉しそうなんだよ？

「いいから乗れ！」

「うむ」

そして、俺はフィアをおぶって猛ダッシュする羽目になった……。

「はぁはぁ……ここまで来れば大丈夫だろう」

ちなみに俺はおよそ5キロの道のりを全力でダッシュしていた。そう考えるとフィアの体力は皆無だということが分かる。……まあ俺の体力が有り余ってるのもあるが。

「凄いなオーガ。今のでかなり進んだのではないか？」

「ああ、街までの道の4分の1は進んだぞ。で、飛んでるやつはどうなった？」

「む、かなり近くまで来ておる」

マジかよ……。

「てかお前凄く軽いな」
「そうか？私はあまり実感がわかぬのだが」
「やっぱちっちゃいからなぁお前」
「小さくない！これでも成長してるのだぞ！」
なぜか顔を真っ赤にさせて叫ぶフィア。なぜ赤くなる？
「言っておくが私は着痩せするタイプだぞ」
「着痩せ？」
こいつは何を言ってるんだ？
「何勘違いしてるかしらねぇけど俺は身長のことを言ってるんだぞ？」
「ふぇ？身長？……オーガ、今私が言ったことは綺麗さっぱり忘れてくれ」
「はいはい」
まったく、何なんだこいつは……。てか、着痩せって何だよ？
「まあ、逃げやすい環境に来れただけ良しとしよう」
「どうしたのだオーガ――って何だこれは！？」

俺とフィアの目の前には大河アマゾネスが広がっていた。

「フィア、川を見るのは初めてか？」

「う、うむ、もしやこれが大河アマゾネスというやつか？」

「ああ、この世界で一番大きな川だ」

「ネットで見たことはあるが本物は初めてだ。凄いなぁ～――む！？渡るには船が必要ではないか？」

「はっはっは、そこが問題だ」

「まさかそなた何も考えていなかったのか？」

「いや、何もというわけではねぇよ。クララに運んでも――」

「却下します！」

ビターン！！！

急に魔魂水晶からクララが出てきて俺をイカ足でひっぱたきやがった。

「次に私を水に入れようとしたら殺しますから！」

ひっぱたいたり、怒鳴ったり、やるだけやってクララは魔魂水晶に帰って行った。

「今のはオーガが悪い」

「いや今の俺非難される様なことしてねぇだろ！？」

「クララは海が嫌いなのだ。ゆえに川と水も嫌いなのだ」

「それを早く言え！」

「ちなみにイカ足の方がパワーが出るらしいぞ」

「嬉しくねぇよ！」

つまりフルパワーでひっぱたかれたってことじゃねぇか！

「それよりどうするのだ？」

「さぁてどうするんだ～い」

「なっ！？」

「やっほ～」

どうやらくだらないやり取りをしてるうちに追いつかれちまったみてぇだ。

「お～オーガ可愛い子連れてんじゃ～ん。彼女？」

「か、かか、彼女！？ば、バカなことを言うでない」

そうゆうことに耐性がないのかフィアは真っ赤になって取り乱していた。

「さぁて、一仕事しますか♪」

「てめぇ、まだ追いかけてくんのかよ……」

「へっへぇ～んだ。地獄の底まで追いかけてやるよ～」

「勘弁してくれよリジー……」

そう、こいつは帝国の魔導兵団所属リジー・サラマンダー。魔導兵の中でも飛びぬけた実力を持ち、杖なしで魔法を発動できる唯一の人間だ。

「むう……私はそなたの様な軽い人間は嫌いだ」

「あたしもあんたみたいなちびっこは好きじゃないな～」

へらへらと言うリジーだったが目が笑ってなかった。まずい……。

「しっかしオーガ、あんたこの前の傷でよく助かったね～」

「まあ、いろいろとあってな」

「そんじゃ思いっきり行くよ！？ＦＩＲＥ！？」

そう叫ぶとリジーは炎を纏って突っ込んできた。俺はギリギリま

で　引きつけてそれをかわす。

「相変わらず無茶苦茶しやがる！」

「それはお互い様だよ！」

という感じで俺とリジーの戦闘が始まったがどう考えても俺の方が分が悪い。

「くそっ！」

「最初の威勢はどうした～！」

何だかんだで俺は追いつめられていた。そんな時フィアがある作戦を耳打ちしてきた。

「……ゴニョゴニョ……」

「……ああ、わかった」

「なぁに、二人して内緒話とかひど～い」

そして、へらへらした顔が急に真顔になり――

「あたしも混ぜてよ。？ＦＩＲＥ！？」

――突っ込んできた。

俺はさっきより余裕を持って引きつけて――

「とうっ」

――川に向かって飛んだ。

「何！？」

「フィア！」

「わかっておる！？ＦＲＥＥＺＥ！？」

フィアは魔法で大河を凍らせていた。

「ちょ、ま、あわ～！？」

ズドッ！　バシャァァン！

大きな音を立ててリジーが凍った大河に突っ込んだ。もちろん全身炎を纏っているから氷を突き破り川に落ちるというわけだ。

「そう言えばオーガ」

「何だ？」

「あやつが落ちた周辺にイビルゲイツやデビルバイトが集まって来ているのだが……この感じは――みな腹を空かしておるようだな」

「それはやべぇだろ！リジー！」

俺は無我夢中で氷を叩き割り川に飛び込んだ。

「くそっ、気を失ってやがる！」

俺はぐったりしてるリジーを抱えながら岸まで泳いだ。

「ゴブルァァァァ！」

「キシャァァァァ！」

「オーガ！後ろからイビルゲイツやデビルバイトが！」

俺の後ろにはイビルゲイツやデビルバイトが迫って来ていた。さすがに俺は水生魔獣を上回るほど泳ぎはうまくないしさっきの戦闘で消耗もしている。ぶっちゃけ助からねぇ。

「オーガ、【ＢＵＲＳＴ！】と叫ぶのだ！」

「は？まあ、何でもいい！鬼が出るか蛇が出るか……？ＢＵＲＳＴ！？」

フィアが言った通り叫ぶと――

「うおぉぉぉぉ！何だ！？力が湧いてきやがる！？」

そして、そのまま俺はイビルゲイツやデビルバイトのいる方に向かって思いっきり腕を叩きつけた。

ザァァァァン！！！

「ブルァァァァ！」

「シャァァァァ！」

俺が水面を叩いたところから大津波が発生し、イビルゲイツやデビルバイトは押し流されていった。

「とりあえずは一安心だな」

それから俺は薪を拾ってきて火を起こした。……リジーが起きてれば火を着けるのも楽なんだがな。

「まずはリジーを休めせねぇとな」

「うむ」

「フィア、クララを呼んでくれ」

「うむ」

「おい、フィア？」

「うむ」

さっきからフィアはうむしか言わねぇ。
「何か怒ってないか？」
「うむ」
「やっぱり怒ってんのかよ……」
「うむ」
でも、何で怒ってんだ？
「ほら、俺の分の焼きデビルバイトやるから」
「っ！」
食い物で釣れたぞこいつ。しかもスゲェ食いっぷり。
「ごちそ――うむ」
「なあ、いい加減教えろよ。一体何に怒ってんだよ」
「……オーガはバカだ」
「……まあ、頭はよくねぇわな」
「そうでない……何も考えずに川に飛び込んで……死んだらどうするつもりだったのだ？」
「あー考えてなかった」

そう言った瞬間、フィアは泣きだした。

「……ぐすっ、えぐっ……ぐすっ……」

「お、おい、どうしたんだよ？」

「もう二度と軽率な行動はするな！オーガが死んだら、オーガが死んだら――」

「フィアお前……」

どうやら俺はフィアに相当心配をかけてしまったらしい。何か悪いことをした気分だ。

「フィア、悪かっ――」

「――オーガが死んだら誰が私をおぶって旅をするのだ！」

「は？」

「それに食事の調達に、道案内、危ない目に会った時の護衛は誰がするのだ！」

「……それ俺が全部やるの？」

「無論だ！」

「えぇぇぇぇ……」

前言撤回、俺はフィアに対してまったく罪悪感など湧いてこなかった。

やっぱりこいつはわがまま姫だ。

あれから俺とフィアはいつまでたっても目を覚まさないリジーを連れてインディ村に向かっていた。

「……最初からこうすればよかったな」

俺はリジーを抱えてフィアが凍らせてくれた川の上を歩いていた。

「結局私は自分で歩かねばならぬのか……」

「これから長い旅になるんだ、少しは自分で歩く努力をしろ」

「むう……」

それからフィアはずっとむすっとした顔のままだった。

「……こんな調子で大丈夫なのか？」

しかも大河アマゾネスは世界で一番でかい川だ。帝国から他の場所を分断する川とも言われるほどだ。川幅も5キロあるしな。

「……ん」

俺が今後のことを心配してるとリジーが目を覚ました。

「はっ！？えっ、何この状況！？」

おおー珍しくリジーがパニクってるぞ。

「目覚めたか？」

「……詳しく説明してもらおうか～」

てなわけでリジーに一通り状況を説明をしたところ、リジーは物凄く暗い顔になった。

「あ～あ、これじゃあ魔導兵団に戻れないじゃ～ん……」

まあリジーからしてみれば俺を殺すのに失敗した揚句、助けられてそのまま旅に同行したことになっちまうからな。

「そなた、リジーといったな」

いつの間にかフィアがリジーの目の前に来ていた。

「何か用か～い？おチビさん」

「むう……そなたのように無駄に（・）身長が高いよりはましだ」

バチバチバチッ！と両者の間で激しく火花が散る。……まあ確かに

リジーの身長は俺と同じぐらいだからなぁ、フィアからすると相当でかいだろ。

「で、用件は～」

「ちょっとこっちへ……」

そのままフィアはリジーを向こうへ引っ張っていった。

「何なんだ？」

＊

「で、話って？」

「そなた、本当はオーガのこと助けるつもりだったのであろう？」

「な、何言ってんのかな～」

わかりやすい反応だな。

「そなたは恐らく何らかの理由で帝国にスパイとして乗り込んでいたのではないか？そして、オーガとは仲が良かったから殺したと報告すれば逃がせると思っていたのではないか？」

「ねぇあんたもしかしてエスパー？」

「私の慧眼の前では嘘をついても丸わかりなのだ」

「慧眼持ちと一緒に旅できるなんてオーガもついてるねぇ～」
「私は慧眼だけでそなたが帝国のスパイと気付いたわけではない」
「へ？」
こやつの名前は――
「リジー・サラマンダー。サラマンダーとは四大妖精の炎を司る妖精であろう？なぜ人間でその性を名乗っいてる？」
「はぁ～あんたには隠しごとできないねぇ～……」
そして、リジーはさっきまでのへらへらした顔とはうってかわり真顔になり言った。
「あまり詳しいことは言えないんだけどさ私はちっちゃい頃に両親を亡くして、妖精に拾われたんだよ。まあ、普通だったら殺されるとこだったんだけど育ててくれたのが四大妖精のサラマンダーでさぁ～、うまいこと生きてきたんだよ」
「なるほど……」
しかし、それでは帝国にスパイとして入った理由にならぬのではないか？
「なぜ、帝国のスパイになったのだ？」
「それだけは言うことができないんだよねぇ～」

「むう……」

どうしても言えぬ事情があるということか。それにしてもさっきから気になっていたのだが――

「そなたの手の甲に着いているグリフォンの紋章は何なのだ？」

「っ！？い、いや、これは生まれつきついているあざみたいなもんだから気にしなくていいよ！？」

「あからさまに狼狽しおって……まあ、これ以上の詮索はせぬ」

人には誰しも知られたくない秘密というものがある。それは、他人が踏み込んでいい領域ではない。

「ありがとねぇ～おチビちゃん」

「（ブチッ！）何か申したかドデカミン」

バチバチバチッ！

どうやら私はこやつとは馬が合わないようだ。

＊

「……むう」

「……あぁ？」

……勘弁してくれ。

「お前らいつまでいがみ合ってるつもりだよ」
「私は別にそのようなつもりはない。ただドデカミンが――」
「あたしも別にいがみ合ってるつもりなんてないよ～。ただこのチビが――」
「ガキかお前らは……」
それにしてもドデカミンって……。まあ、リジーの身長のことを言ってるんだろうな。どデカ民ってことか。
「それよりリジー、結局お前どうすんだ？」
「へ？何が？」
「魔導兵団に戻るのか？」
「だ～か～ら～さっきも言ったじゃ～ん。あたしはもう戻れないっーの」
「じゃあ、どうすんだよ？」
「オーガとチビの旅に同行する」
「そなたなどいらん帰れ」
「まあ、落ち着けフィア。それで、魔導兵団の方はどうするんだ？」

「まあ、何とかなるっしょ」

適当だなぁおい。

「そうゆうことならリジーも一緒に来てくれた方が助かるな」

「チッ」

となりからあからさまに顔をしかめたフィアが舌打ちした。

「まあ、旅は道連れ世は情けって言うだろ？そう邪見にするな」

「オーガがそう言うならば仕方あるまい」

フィアは何とか納得してくれたようだ。

「あ～そうだ、オーガ。忘れ物持ってきてやったぞ～」

ブォン！と凄い音を立てて棒状の何かが飛んできたから反射的に受け取るとそれは――

「おお！俺の斧じゃねぇか！ん、何で俺の斧持ってんだよ？」

「いや～オーガが帝都から逃げる時に落としたっしょ？そん時にあたしが拾ってたんだけどさすがに元同僚の大切な武器を捨てるわけにもいかなくってさぁ～」

「……嘘だな」

フィアがぼそりと呟いた。

「おチビちゃんは黙ってようねぇ～」
「……まあ、何でもいい。武器があるのはありがてぇしな」
ん、待てよ――
「なあフィア、お前氷でソリみたいなの作れねぇか？」
「うむ、出来るが急にどうしたのだ？」
「んじゃ、フィアがソリを作ってリジーがそれを引っ張ってくれよ」
「おお、なるほど！」
これなら楽に移動できるはずだ。
「盛り上がってるとこわるいけどさぁ～、あたしが発火してる時だとソリ解けちゃうでしょ？」
「「あ」」
「じゃ、じゃあ、縄か何かで引っ張っても――」
「それじゃ～縄が燃えちゃうでしょうが……」
「「あぁ……」」
どうしたもんか……。

「む、何か下の方から巨大な生物がこっちに来るぞ」

「イビルゲイツじゃないのか？」

「イビルゲイツにしては大きさが合わない気がするのだが……」

「じゃ～イビルゲイツのボスとか？」

「むう……イビルゲイツは普通体長２メートル程度であろう？私が見るに下におるやつは裕に体長１０メートルは超えておるぞ？」

「一体何が来るんだろ～ね」

「鬼が出るか蛇が出るか……」

「オーガ、そなたはその言葉が好きなのか？」

「あれ、俺そんなに頻繁に使ってたか？」

自分ではそんなに意識してねぇんだけどなぁ……。

「っ！？来るぞ！」

バシャァァン！！！

「キュゥゥゥゥ！」

氷を突き破り姿を現したのは――

「「「ウナギ！？」」」

――ウナギだった。

「何かもっとこう……強そうなのが来ると思ったんだけどなぁ……」

「こらこら、ウナギがかわいそうでしょ」

「こやつは電気ウナギなのか？」

「どうだろうな？」

「キュゥゥゥゥ！」

「向こうには敵意があるみたいだし、攻撃しても問題ないっしょ？？FLAME！？」

リジーが火の玉を投げつけると――

プシュウ……

――火の玉はウナギの体に当たった途端消えてしまった。

「うっそぉ～！？」
「キュッキュキュゥゥゥ！」
「むしろ元気になってないかこいつ？」
「うむ、元気なのはいいことだ」
「お前は呑気だなぁ」
「で、あたしの炎が効かないっとなると……」
「私の出番だな！？ＩＣＥ！？」
今度はフィアが氷の玉を投げつけると――
ムシャムシャ……
「キュウ、キュゥゥゥ！」
「あ～私の氷が……」
――おいしそうに味わって食べられた。
「どうしたもんかねぇ～」

「氷もダメ、炎もダメとなると――」
「――俺の出番か」
「うむ、任せた」
「そういや何で【ＢＵＲＳＴ】なんだ？」
「オーガ、簡略魔法（シンプルマジック）を知っておるか？」
簡略魔法。確か――
「――強力な魔法を使う時、詠唱時間の省略し一言で済ませる魔法のことだよな？」
「そんなところだ。しかし、強力な魔力を必要とするため生まれつき莫大な魔力をもつ者だけが使用することができる魔法だ」
「ああ、フィアにリジー、使えても不思議じゃねぇな」
妖精の姫のフィアに魔導兵団の実力者のリジー、二人とも簡略魔法を使うには十分すぎる素質を持っている。
「そなただって魔王子ではないか」
「ああ、そういやそうだったな」
「では魔魂召喚も簡略魔法の一つだということは知っておるか？」
「マジか！？」

「それはあたしも知らなかったなぁ～」

「魔魂召喚とは召喚者の魔力の代りに魔魂水晶に込められた魔力を消費し魔法の簡略化を行っておるのだ。つまり、オーガの場合は自分の魔力を増幅し自分自身を強化する魔法というわけなのだ」

なるほどな。そうゆうことなら納得がいくが――

「――結局何で【ＢＵＲＳＴ】なんだ？」

「そなたの魔法は魔力を増幅させ、一気に解き放つ魔法なのだぞ？」

「ああ、だから【ＢＵＲＳＴ】なのか」

「しかしよくわかったな」

「こう見えても頭はよいのだ」

ただのわがまま姫じゃなかったんだなぁ……。

「つ～かあんたら長話もいいけど早くウナギ殺っちゃってよ～」

「ん、そういやウナギはどうした？」

「キュ～キュキュゥゥ～」

「オーガ、ドデカミン、ウナギが物凄く懐いたのだがどうすればよい？」

「キュルルキュゥゥ～」

ウナギはさっきからフィアに頬ずりしている。

「「メッチャ懐いとる！」」

「あ、そうだ」

急にリジーが何か思いついた様だ。

「このウナギたぶん劫熱ウナギだと思うからさっきオーガが言った方法ですぐ村に行けんじゃ～ん！」

劫熱ウナギって確か熱に強くて炎を吐くあの劫熱ウナギか？

「図鑑とは随分違うんだな」

「こちらの方が数千倍は可愛い見た目をしておるな」

「フィア、さっき俺が言った方法の綱の役目をそのウナギにやってほしいんだが頼めるか？」

「うむ、やってみる。キュルルやってくれるか？」

「キュル～」

「「キュルル？」」

「こやつの名前だ」

「そのまんまじゃねぇか……」

「まあ、いいじゃん。とにかく飛ぶからつかまんな～」

ガブッ！とキュルルはリジーの足を咥えた。そんでもって俺はキュルルの尾びれを掴んでフィアの作った氷のソリに乗った。

「あまり気分いいもんじゃないねぇ～これ……」

「文句言わずに飛べよ」

「はいは～い？ＦＩＲＥ！？」

結局数分で大河アマゾネスを渡ることができた。

「キュルル、元気でな～」

「キュルルゥゥゥゥ～」

そして、キュルルは川に帰っていた。

「そ～いえばあたしはソリ引っ張って、チビはソリ作ったっしょ～。オーガは何もしてないよね？」

「キュルルの尻尾持ってただろ？」

「「それだけか？」」

「いや、結構大事だろ！」

「「えぇぇぇぇ……」」

二人にジト目で見られ気まずい雰囲気になり結果的にインディ村に着くまで俺が全員分の荷物持ちをする羽目になったのは言うまでもない……。

第二話　大河アマゾネス（後書き）

というわけでリジーが仲間になりました！
これからも続きを書かせていただくので応援よろしくお願いします！
次回はインディ村です！

人物紹介　その2

リジー・サラマンダー……元魔道兵団副隊長。主に炎の魔法を使い、全身に炎を纏えば空を飛ぶこともできる。オーガが帝国でお尋ね者になってからはオーガを殺す命令が出て仕方なく逃げるオーガを追いかけていたが、オーガが近衛隊にいた頃に友人として仲が良かったため本当は殺す気はなかった。ある事情で帝国にスパイとして潜り込んでいた。嘘が下手。

特徴：金髪の混じった赤い髪でショートカット、碧眼、しゃべり方が軽い。

好きなもの：激辛料理

嫌いなもの：誰かの不幸を金儲けに使うこと。

第三話　インディ村の村長

『はっはっは、剣に振られてるようじゃまだまだだな』

『うるせぇ！こんな重い剣持てるか！』

『オーガ、武器ってのはなどんな理由があろうとも相手を傷つけるものだ。武器を使いたくなければ振らなければいいだけの話だ。だが、武器を振るのならばその重さを受け止め自分の意思で武器を振れ。決して力に呑まれるな』

「――はっ！」

俺が目を覚ますと周りは森で焚き火を囲んでフィアとリジーが眠っていた。

「ああそうか……確かインディ村に着く前に日が暮れちまったんだったな」

結局あの後フィアがもう歩けないとか言いだして、リジーも夕方以降は魔族が活発に活動しだすから下手に動かない方がいいとか言いだす始末だ。俺はとっとと行こうと言ったんだが、「「多数決だ！」」と言われた俺は2人の意見に賛同せざるおえなかった。しかもあいつら俺に薪広い、食材集め、夕飯の準備片づけ、全部やらせやがった。何が「あたしは火着ける係ねぇ～」だよ！フィアも「私がいなければ誰が飲み水をを持ってくるのだ？」とか抜かしやがって、てめぇだって氷溶かすのはリジーにやってもらってんじゃねぇか！クララに至っては「料理が出来る男性はモテますよ。ここは王子（仮）の腕の見せ所ですよ」と言ってさらりと仕事放棄しやがっ

た。お前メイドだろうが……。まさかこんなところで定食屋でコビーに料理を教わったことが役に立つとは思わなかった……。

「『力に呑まれるな』か……」

あの時は武器を振る力のことを言ってるもんだと思っていたが、今思うと魔王の力のこともおっさんは言ってたんだろうな。

「おっさん今頃どうしてんだろうなぁ？」

ま、考えてもしかたねぇか。俺はもともと考えるより先に行動するタイプだからな。

「……斧でも振るか」

俺は背中の鞘に差さっている棒きれを抜いた。それはあっという間に巨大な斧に変わった。

「しっかしあの鍛冶屋のオヤジも不思議な武器作るよなぁ」

魔剣斧【大剣鬼】それがこの斧の名前だ。確か、東の島国で日和の国ってことで名工によって打出された妖刀を鍛冶屋のオヤジが改造して斧にしたらしいが……。

「斧の要素０じゃねぇか……」

鍛冶屋のオヤジはちゃんと名前をつけたらしいが結局武器は最初の名前が一番とか言いだして元の名前に落ち着いたんだとさ。確か鍛冶屋のオヤジがつけた名前は【サタンクレセント】だったな……そっちの方が俺の武器っぽいんだけな……。

「まあいい、素振り始めるか……」

ブォン！　ブォン！　ブォン！　ブォン！

結局その夜は眠れず、俺は朝まで斧を振り続けた。

――翌朝

「ふぁ～あよく寝た～。ん、どったのオーガ？」

「目の下に凄い隈が出来ておるぞ。昨日眠れなかったのか？」

（あらまぁ、寝不足のせいで王子（仮）の顔がより強面になってますわ）

「まあ、いろいろあってな……」

しかし改めて思うんだが、帝国に追われている身でよくもまあすやすやと眠れるよなこいつら……。

「それより、もうすぐインディ村に着くぞ」

「本当か！やっと旅をして初めての村に着くのか！」

「チビは朝っぱらからテンション高いなぁ～……」

「油断するなよ、なんだかんだいって追っては来るんだからな」

「ん、追手？あたしのこと？」

「お前はもう俺達と一緒に来てるじゃねぇか！そうじゃなくてお前の同僚が追ってくるかどうかの話をしてるんだ」

「ああ～そうゆうことなら多分大丈夫っしょ」

「ん、追手はお前一人だったのか？」

「いや、あたしが帰ってこなかったら殺られたと思って一回引き返せとは言ってあるから多分追ってに関しては心配しなくても大丈夫だよ～」

「そうか良かっ――追手に関しては？」

何か妙に引っかかる言い方だなおい。

「お、鋭いねぇ～さすがオーガ！追ってはこないけどあたしたち岩戸の調査しちゃったんだよねぇ～……」

……いやな予感がする。

「結界が破壊されてチビが逃げ出したことバレちゃった～てへぺろ☆」

「てへぺろ☆じゃねぇよ！それヤバいだろ！」

（・ω<）←こんな顔しやがって……！

「大丈夫大丈夫、チビがお尋ね者になっただけだから」

「わ、私がお尋ね者……」

フィアは地味にショックを受けているようだ。

「まあ、確かに今更お尋ね者が1人から2人に増えたぐらいでビビるこたねぇか……」

気にする程度のことでもないのになぜか気になってしまう。そして頭のモヤモヤはインディ村に着くまで続いた。

「「着いたぁぁぁぁ！」」

「やっと着いたか……」

というわけでインディ村に到着。

「おや、冒険者の方ですか？」

俺達が村の入り口で騒いでいると向こうからサメの着ぐるみを着てカウボーイハットを被っているおっさんがやって来た。……どこから突っ込めばいい？

「……ああ、俺とこのはしゃいでる2人で旅をしている」

「そうですか～！いや、申し遅れました。私はこの村で村長をしておりますジョーズ・インディと申します。冒険ははじめてですか？」

随分と陽気な人だな。まあ、こんな人だから村長が務まるのかもな。

「冒険っていうかただの旅なんだが……まあいい、俺やそこのチャラい赤髪女は何度か遠征はしたことがあるが、そこの青い髪のポニーテールのチビは外に出るのも初めてなんだ」

「今、すっごぉ～く失礼な紹介をされた気がするんだけどぉ～」

「チビで悪かったな！」

何か後ろの外野がわーわー言ってるがまあいいか。

「それより、ここはどんな村なんだ？」

俺はインディ村に来るのは初めてだ。さっきは遠征したことがあるって言ったが、遠征っていってもせいぜい国境付近に行った程度だ。

「はい、この村は冒険者の方々が必要とするものなら何でも揃っております！武器屋、雑貨屋、使い魔の契約所、銀行、などなどかなりの店が軒を連ねております」

「使い魔の契約所まであるの――」

「――ちょ～っと聞きたいことがあんだけど」

俺の言葉を遮ってリジーが真顔で言った。いつものへらへらした顔はどこへやら、真顔どころかリジーは今まで見たことがないくらい怖い顔をしていた。

「な、何でしょうか？」

「使い魔の契約所って言えば聞こえはいいけど実際のとこはどうなんよ～？」

「ど、どうとは？」

「魔獣販売所じゃないかって聞いてんだよ！あぁ！？」

村長の胸倉を掴み声を荒げるリジー。一体どうしたってんだよ？

「落ち着くのだリジー！」

慌ててフィアがリジーを村長から引きはがす。

「すまないな、村長」

「いえ、その方が言った通りでございます……。契約所とは表向きの名前で実態は魔獣販売所と言われても仕方ありません……」

「だが、魔獣の販売は許可されているのか？」

「ここはアルフヘイム帝国の法律は適用されませんから――っ！」

村長はリジーの方に付いてる帝国のエンブレムを見てギョッとした表情になった。

「て、帝国軍の方だったですか！？」

「いや、こいつはもう兵隊じゃ――」

「そうだよ、あたしはアルフヘイム帝国魔導兵団副隊長リジー・サラマンダーさ」

「おいリジー！」

「お、お願いします！この村を存続するには魔獣を売り買いしなければ資金が集まらないのです！どうかお許しを！」

恐らくこの村は多く冒険者が初めにくる村らいしな。店の数や品揃え、商品の値段、どれを取っても帝都に負けないレベルだ。だが、いくら少し大きめの村でも所詮は村だ。帝都に負けないレベルのクオリティとなると莫大な資金が必要になる。で、その資金源が使い魔の契約所ってわけか。

「使い魔を欲しがる冒険者はいくらでもいるだろうからな。資金源にはぴったりってわけだ」

「だからって何の罪もない魔獣を捕まえて売りさばくことが許されんの？オーガも何でそんな冷静なんだよ！あんた魔王子だろ！仲間が売られて何とも思わないのか！」

「ま、魔王子！？」

「あー村長、その話は後だ。リジー、さっきも言ったが落ち着け」

ふぅとリジーは深呼吸をした。

「ちょっと熱くなりすぎたよ……」

「すみません……ですが村のためにも、商売をやめるわけにはいかないのです」

「村長、あんたもいろいろあると思うがとりあえずはこの話はやめにしよう」

「オーガ！」

「それとお前も魔導兵団をやめた後でその名前を使うな！」

俺はリジーの肩に付いてる鳥っぽいエンブレムを引っぺがした。

「あ～オーガ何すんだよ～！」

「村長、脅すような真似をして悪かったな」

「いえいえ、いいのです。それよりちょっとお話を聞かせていただけませんか？」

「俺が魔王子ってことか？」

「……はい」

――てなわけで村長の家へ

「どうぞお座りください」

「ああ。俺はさっきも言った通り魔王の息子だ」

「だが、オーガはそのことをつい最近知ったのであろう？」

「あ、そうだったんですか？」

「まあな。親父の顔は見たことねぇしどんな奴だったかも知らねぇよ」

「む、ここは冒険者のための村であろう？だったら魔王や勇者の話の１つや２つくらいあるのではないか？」

「ええ、勇者や魔王の話は有名ですから」

「え、マジで！？」

俺、一度も勇者とか魔王の話聞いたことねぇぞ？

「オーガはあまりそうゆうことには興味がなかったのであろう？私はネットで結構その手の話は知っておるぞ」

情報ソースはネットかよ……フィアの知識は思いっきし片寄ってる気がするんだが。

「まあネットに載っているのもそうですが、その話は本当の話ですよ」

「何でわかるんだ？」

「この村に勇者が来たことがあるからですよ」

「「「！？」」」

マジかよ……ん、でも待てよ。それ本当に勇者だったのか？

「もう何年前ですかねぇ……勇者はまだ私の父が村長だった頃に村にやって来ました。その頃はまだ勇者というより若さに任せて飛びだした冒険者という印象が強かったですね」

「で、何でそいつが勇者ってわかったんだ？」

「剣ですよ」

剣？

「彼は勇者の剣【エクスカリバー】を持っていたのですよ」

「村長は何でそれが本物だと？」

「私たちインディ一族は勇者を見送るという大事な使命を持っているのです。なので私も勇者を見極めるために剣の目利きや人を見る目は鍛えてきたのです。あの剣は凄腕の職人が作ったものです、間違いありません！」

凄い自信だな……。

「ん、勇者って何人もいんのか？」

「オーガ、本っ当にあんた何も知らないの～？」

「昔からの言い伝えで【世界が危機に陥った時勇者は現れる】というものがあるのだが……本当に知らんのか？」

リジーとフィアが珍しいもの見る目で俺を見てきた。え、そんな有名な話なのか？

「つまり、世界が危機に陥った時が来たってことか？」

「「えぇぇぇぇ！？」」

「な、何だよ！」

「冗談っしょ？」

「オーガそなたどこまで世間知らずなのだ？」

「十年間岩戸でニート生活してたフィアに言われたかねぇよ！」

てか、さっきから2人が信じられないものを見る様な目で見てくるんだが……。

「俺をそんな目で見るな！」

「ま、まあ、落ち着いてください」

「で、オーガのために説明してあげっけど、世界の危機ってのは魔族が人間や妖精を襲ってたってことなんだよ～」

魔族が人間や妖精を？

「まあ、詳しい話は村長さんから勇者と魔王の話聞けばわかっから。んじゃ村長さんあとよろしく～」

「はい、もうかれこれ四十年ほど前になりますかね……」

――かつて、魔王は魔族が人を襲っていたことを何とも思っていなかった。それが当たり前のことだと思っていたからだ。そんな状況を打破するべく一人の少年が立ちあがった。そう、彼こそが世界を救った英雄勇者だ。勇者はエクスカリバーを携え魔族の島【コブラナイ島】へと旅立った。勇者は数々の困難を潜り抜け魔王の城へとたどり着いた。しかし勇者は一度も剣を抜かずに魔王のもとへとたどり着き魔王に言った。『俺は戦うつもりは無い話をしに来たんだ』魔王はそれに応じ、話をした結果魔王を説得することに成功したのだ。それからは魔王は2度と人間や妖精は襲わないと約束し、三種族は仲よく平和の道を歩もうとしていた――。

「えぇぇぇぇ……。折角すげぇ剣持ってんだから戦おうぜそこは」

「勇者と魔王が戦っておったらオーガはこの世にいなかったのではないか？」

「ああ、それもそうか」

「つーか、2人とも話は最後まで聞こ～よ……」

――だが、ある時魔王は勇者との約束を破り魔族は妖精に一斉攻撃をしかけた。妖精達は成す術もなく大打撃を受けた。そして、人間は魔族と妖精がお互いに消耗し合っているのを見てこのままなら自分たちがこの世界を支配できると考えだした。そして、人間はとうとう妖精と戦争を起こし、勝利した――。

「というのが世間一般で言われている勇者と魔王のお話です」

「はぁ～そんなことがあったのか――ってリジーどうしたんだ？」
「へ？な、何でもないよ～」
見るとリジーは何かをこらえるようにして唇を噛んでいた。強く噛みすぎたのか唇にはうっすらと血がにじんでいる。腹でも痛いのか？
「ちょっとあたしはこの村の武器屋とか雑貨屋見てくるよ」
そう言ってリジーはそさくさと行ってしまった。
「……本当に分かりやすい奴だ」
「どうしたフィア？」
「何でもないぞ」
「そうかならいいが……」
「そういえばオーガさんでしたっけ？」
「ああ、どうした？」
「あなたの武器をちょっと見せてもらえませんか？」
「別に構わないぞ」
そう言って俺は背中の棒きれを引き抜いた。途端にそれは巨大な

斧になった。

「これは凄い……。この斧はどこで？」

「帝都の鍛冶屋で剣を改造して作ったらしいぞ」

「そうですか……いやはやこれは……」

さっきから村長は斧を見て真剣に唸っている。何なんだ一体？

「この斧は恐らくエクスカリバーを打った人と同じ人が手を加えています」

「マジで！？」

何か今日の俺は驚いてばっかだな。

「ありがとうございました」

そう言って斧を俺の方に返してくる村長。

「俺の斧が勇者の剣と同じ……か」

「そういえばオーガさん、顔や見た目は違いますが雰囲気は勇者と似ていますね」

「おいおい、冗談はよしてくれ！俺は魔王子だぞ？魔王が勇者になるとかそんな話聞いたことねぇぞ」

「だが、オーガはまだ魔王子であろう？なら可能性はあると思うぞ」

「フィアまで何を言い出すんだよ……」

「オーガが世界を救ったら私達もお尋ね者ではなくなるぞ？」

「その発想はなかった」

「ご安心ください私の目に狂いはありません。頑張ってくださいオーガさん」

え？もう俺が勇者になること決定事項？

「まあいい……とにもかくにも俺達は旅の途中だ。いろいろと準備をしなきゃな」

「うむ、私はお腹が空いたぞ」

「では、そこの土産店で飲み物や食べ物が売っていますから是非見て行って下さい」

「ああ、いろいろと世話になったな」

そうして俺とフィアは村長の家を後にした。

「オーガ何を飲んでおるのだ？ヨーグルトか？」

「いいや、ケフィアだ」

「ケフィア？」

「よくＣＭでやってるだろ『ヨーグルト？いいえ、ケフィアです』って」

「私はネットしか見ておらんからわからん」

「十年間ネットしか見てなかったのかよ……ケフィアってのはなワクチンを接種していない牛やヤギ、羊の乳とかで作るカリフラワーみたいなやつを蜂蜜とかと混ぜて液体にした奴のことだよ」

「ほう、よく知っているな」

「まぁな、近衛隊にいた時から飲んでるしな」

そういや近衛隊長、今何したんだろうなぁ。そう思いながらフィアの方を向くと――

「ふぅ、オーガの奴がここにいると聞いてきたが無駄足だったか……」

――ベンチに腰掛けて休んでいらっしゃる近衛隊長がいた。

「――ぶごっ！」

ブシャァァァァ！

俺は驚きすぎてつい飲んでいたケフィアを噴き出してしまった。…

…フィアの顔面に。

「ひゃっ！？いきなり何をするのだオーガ！」

「わ、悪ぃ……」

「まったく……クララ顔を拭いてくれ」

フィアがクララ呼ぶとクララはフィアの魔魂水晶から出てきた。

「呼びましたか姫（笑――どうされたのですかその顔！？」

「ああこれか、オーガの奴がいきなりぶっかけてきおったのだ」

「白昼堂々何をやっているのですか王子（獣）！？」

「お、落ち着けクララ。お前は重大な勘違いをしている」

てか（獣）って……。

「勘違い？何を言っているのですかこの魔王子から盛った魔獣に成り下がった腐れ外道王子（堕）！」

言うだけ言ってクララは魔魂水晶に戻って行った。せめてフィアの顔に付いたケフィア拭いて行けよ……。

「なあオーガクララは何を騒いでおるのだ？」

「……知らないならそれでいい」

この話はフィアにはまだ早いな。うん、まだ早い。

「一体どうしたのだオーガ？」

「いや、ケフィアとフィアって名前似てるなぁと思ってな……」

「おお、確かに！」

「てか、いい加減ケフィア拭いたらどうだ？」

「ハンカチがないな……舐めるから拭かなくてもよいぞ」

「いや、俺がちゃんと拭いてやるから絶対に舐めるな！」

これ以上クララの誤解を深めるわけにはいかない俺は必至でフィアの顔をハンカチで拭いた。

「そういやリジーはどこへ行ったんだ？」

「武器屋や雑貨屋を見てくるとか行っておったの」

「……いや、あいつのことだから使い魔契約所にいる可能性が高い」

揉め事を起こしてないといいけどな……。

いざ使い魔契約所に行ってみると俺の予想は外れてリジーはいなかった。

「本当にあいつはどこへ行ったんだ？」

「まあよいではないか。それより店の方を見て行かぬか？」

「そうだな」

店内に入るとそこには誰もいなく、魔獣達が檻に入れられていた。これじゃあ使い魔契約所じゃなくてペットショップだな……。

「おい、誰かいるのか」

静まり返った店内の奥の方で声がした。そして、奥の方に行ってみると――

「誰だお前ら？」

――紫色の猫がいた。

第三話　インディ村の村長（後書き）

魔王と勇者の大まかなお話が村長から語られましたが、詳しいエピソードは外伝の方で書いて行こうと思います！
紫色の猫は一体何者なのか？ご期待下さい（笑）

第四話　魔王の契約

「誰だお前ら？」

俺とフィアが使い魔契約所に行くとそこには紫色の猫がいた。

「俺はオーガ、そんでもってこっちのチビポニーテールはフィアだ。お前の名前は？」

「おいらはヘブラスだ」

紫色の猫の「……不名誉な端折られかたをされた気がするのだが……」名前はヘブラスというらしい。

「で、こんな場所に何の用だい？」

「いや、仲間を探しているんだが――俺と同じぐらいの背丈で赤い髪にところどころ金髪が混じった女を探しているんだが」

「いや、見てねぇな」

「そうか、ありがとうな。そういや、ここには店主はいないのか？」

「それは私も気になっておったぞ」

無人の使い魔契約所何てねぇだろうし、ましてや村長が村の資金源にしてる商売だ。魔獣に何かあったらヤバいだろ。

「ああ、この店の店長はおいらなんだ」

「「はぁ！？」」

猫が店長？そんなバカな話聞いたことがない。

「まさかおいらがただの猫だと思ってないかい？」

「「思ってる」」

ズコー

俺達がハモった瞬間ヘブラスはレジから滑り落ちた。

「しゃべる猫がどこにいるよ？」

「「あ、そうか」」

ズコー

「こいつらバカなのか？」

「む、バカとは心外だ。オーガはいいとして私はバカではない、世

間知らずなだけだ」
「偉そうに言えることじゃねぇよ……」
「せっかくこの店に来たんだ。何か魔獣と契約しないかい？」
「私にはすでに使い魔がおる」
「俺はフリーだが……」
「じゃあ、こいつなんてどうだい？」
ヘブラスは近くにあった檻を器用にレジまで運んできた。
「へぇ【ユニコーン】かまだ子供だが移動には便利そうだな……」
「お、気に入ったかい？」
でもユニコーンは移動用だしなぁ……。
「やっぱ戦闘用だよな～」
「だったら……よっこらせっと」
今度はやけにデカい檻を持ってきた。……この小さい体のどこにこんな力があるんだ？
「む、オーガなぜ私を見る？」
「いや、何でもねぇよ」

ただフィアよりちっちゃいのに力のあるヘブラスを見習って欲しいと思っただけだ。

「オーガ、こいつ何か戦闘向きだと思うぞ」

「却下だな」

ヘブラスが持ってきた魔獣は【ミノタウロス】だった。しかもアピールしているのか斧をブンブン振り回している。

「即答かい……」

「オーガ、どこが気に入らなかったのだ？」

「だってミノタウロスは力任せに斧を振り回すんだろ？」

「うむ、それがどうかしたのか？」

「俺とキャラ丸被りじゃねぇか」

「「ああ……」」

２人とも俺の背中の斧を見て納得したようだ。

「まったく、オーガが気に入る使い魔がこの店にいるか心配になってきたよ……」

恐らくいねぇだろうな。

「そういや、さっき言ってた俺が探してる仲間が『何の罪もない魔獣を捕まえて売りさばくことが許されんの？』って村長に喰ってかかってたんだがヘブラスはこの商売のことどう思ってるんだ？」

俺が聞くとヘブラスは困ったような顔をした。まあ、俺も『仲間を売られて何とも思わないのか！』って言われて困ってたとこだしな。

「おいらにはわんかんないや」

「そうか……」

「ただ言えるのは、売られた魔獣が決して不幸になってはいないってことだよ」

「何でそう言い切れるんだ？」

いきなり捕まったと思ったら檻に入れられて売りさばかれるんだろう？どう考えても不幸だろ。

「おいらが店主をしている店の奴らだ。魔獣を不幸にしそうな奴らにはおいらが売らないから大丈夫だ。それに檻に入ってる奴らは自分の意思で入ってるし、普段は檻には入っていないんだぞ？他の店はどうだか知らねぇがおいらの店だけは大丈夫だ」

「そうだったのか……」

こりゃ後でリジーを説得する必要があるな。

「しかし、そのお嬢さんは優しい人なんだな」

「「いや、それはない」」
「またきっぱりと言い切るねぇ……」
「あいつは人使いが荒い」
「あやつは私のことを子供扱いしすぎだ！」
「それはしょうがなくね？」
「私はもう１５歳だ！」
「リジーは１６歳だぞ？」
「い、１歳負けた……」
膝から崩れ落ちるフィア。いや、そこまでショック受けるか？どんだけリジーに対抗意識持ってんだよ……。
「んじゃ俺達はもう行くぞ。こいつは選別だ」
そう言って俺はレジにケフィアを置いた。
「まだ持っておったのか……」
「別に好きなんだからいいだろうが」
「ああ、またいつか会えるといい――っ！？」

急にヘブラスが俺の手の甲を見て固まった。
「どうした？」
「こ、この紋章は……」
ヘブラスが言っているのは俺の手の甲にある何かよくわかんねぇ獣みてぇな紋章のことだろう。
「お、オーガ、お前のフルネームは？」
「フルネーム？オーガ・ザントマンだが……」
「ザントマン！？ま、まさか――」
ああ、ヘブラスが驚いてるのはもしかして。
「――そのまさか、俺は魔王の息子だ」
「ほ、本当か！？」
「いや、お前が聞いたんだろ……」
「ヘブラス、そのような反応をするということはそなたは魔王とつながりがあったのではないか？」
「ああ、おいらは魔王サダル・ザントマンの使い魔だったんだ」
サダル・ザントマン。それが親父の名前か……。

「なあ親父はどんな人だったんだ？」

「オーガはサダルのことあんまり知らないのか？」

「俺は物心ついた時は帝都の定食屋で育てられていたからな」

ついでに頼んでもいねぇのにおっさんにびしばし鍛えられたしな。

「何か知っていることがあったら親父のこと話してくれないか？」

「ああ、世間一般では魔王は勇者を裏切ったとか言ってるがそんなの嘘だ！裏切ったのは勇者の方なんだよ！」

「何だって？」

「あれはおいらがサダルと一緒に他の王の会合に行こうとした時――」

――サダルは他の2王との会合に向かうためにコブラナイ島を出発しようとしていた。でも、そこに勇者がやって来て船を用意しているから一緒にいこうと誘ったんだ。わざわざ迎えに来てくれたのかと思って不用意に近付いたサダルは勇者にいきなり切られて剣に塗ってあった毒で気絶してしまったんだ。おいらはそこから逃げるのが精一杯で、何とかこの村まで来て、村長にこの店を任された――。

「これが魔王と勇者の物語の真実だよ」

俺とフィアはヘブラスの話を聞いてしばらく動けないでいた。恐らくヘブラスの話は本当だろう、なんせ目の前で魔王が勇者にやられるところを見たのだから。

「サダルは人間のことも妖精のことも信じていたんだ……。なのに勇者はそれを！」

ヘブラス……。

「安心しろヘブラス、俺が誰も裏切らない勇者になってやるよ。んで、先代の勇者を見つけたら締めあげてやるよ！」

「オーガ……」

「む、オーガ！村の広場の方にたくさんの魔族がなだれ込んでおるぞ」

「何！？」

「1人、2人、3人、4人……30人！？この数……恐らくコボルトだな」

「コボルト？」

「ゴブリンの仲間で元々は人間の手伝いをしてくれる魔族だったのだが人間支配の時代になってからは盗賊として人間を襲ったりしておるのだ」

「急がねぇとヤバいな……。そうゆうわけだからまた今度なヘブラス！」

「お、おい！」

俺とフィアは広場に急いだ。

「……人間を守るために走り回るのはサダルと一緒だな」

――インディ村広場

俺達が駆け付けた時には思ったよりも状況は深刻だった。

「ひゃっはっは、人間どもめ金を出せ！」

「おい、こっちには人質がいるんだ動くなよ？」

「くっ、人質をとるなど卑怯だぞ！」

コボルト軍団は人質をとり、1人の兵隊が動けないでいた。あれは――

「近衛隊長じゃねぇか！？」

「オーガ知り合いなのか？」

「ああ、俺が近衛隊にいた頃あの人は隊長だったからな」

「ということはオーガの上司なのか？」

「正確に言うなら元上司だな」

しかし、隊長が動けないとなると俺やフィアが行くしかないな。

「うし、ちょっくらあのコボルト達締めてく――」

「――待つのだ」

軽くコボルト達を締めに行こうと思ったらフィアに止められた。

「何だよ？」

「あのコボルト達何かがおかしいのだ」

「おかしいって何だよ？」

「それはわからん……だが、私の慧眼では体の奥から何かこう……どす黒い力が見えるのだ」

「何だそりゃ……まあ、フィアが言うんだから間違いねぇんだろうな」

どす黒い力か……。

「で、コボルト軍団はそれでパワーアップしているのか？」

「うむ、兵隊レベルでは太刀打ちできないほどにな」

じゃあ、隊長ピンチじゃね？

「じゃあ行ってく――」

「――待つのだ」

また、フィアに止められた。

「今度は何だ？」
「人質の中にドデカミンがおる」
「は？マジで！？え、どこどこ？」
人質を見渡したがリジーらしき人はどこにもいなかった。
「いねぇじゃん」
「私は慧眼で見ておるのだぞ？ドデカミンは……あそこの噴水の前のところにおる」
「んー、ん！？あれがリジーか！？」
フィアの言った通り噴水の前を見るとそこには帽子をかぶりキャミソールにスカートというリジーとは思えない格好の女がいた。
「帽子をかぶってるから気付かなかったぞ……」
「……そなたはドデカミンの髪しか見ておらんのか？」
いやだってあいつの髪の色珍しいじゃん。
「で、結局どうすんだ？」
「人質はドデカミンに任せても大丈夫そうだな……。」
「んじゃ、俺達は隊長を囲んでるコボルトをやっちまうか」

「うむ、それでは行くぞ」

そして、俺は背中の棒きれを引き抜いた。途端にそれは巨大な斧になった。

「行くぜぇぇぇぇ！」

ガキンッ！

俺は今にも隊長に切りかかろうとしているコボルトの剣を受け止めた。

「オーガ！？」

「隊長、話はこいつらを蹴散らした後だ」

しかし、こいつら結構強いな。剣を受け止めた時の一撃はかなり重かったぞ。

「なめんじゃねぇぇぇぇ！」

近くにいたコボルトが俺に棍棒で殴りかかってきた。

「フィア！」

「わかっておる！？ＩＣＥ！？」

ガシャァァン！

「はぶぁっ！？」

フィアは俺に殴りかかってきたコボルトを氷の玉で吹っ飛ばした。

「おい、動くな！」

声がした方を見るとコボルトが１人の女の首にナイフを突き付けていた。

「こいつの命が惜しければ――」

「台詞長～い？ＦＩＲＥ！？」

ボウッ！

「ぎゃぁぁぁぁ！」

人質を使って俺達をおとなしくさせようとしていたコボルトは脅し文句を言い終える前に火だるまになっていた。

「リジーせめて最後まで言わせてやれよ……」

「人質とるよ～な奴に同情はいらないっしょ？」

「そなたらは火だるまになっていることに関しては同情せぬのだな……」

「んじゃ、もう一暴れすっか」

こいつらは確かに強いが――

「まあ、俺達の敵じゃねぇな」

――魔魂召喚するほどじゃねぇ。

結局コボルト達はものの数分で片付いた。

「ふぅ、結構手こずったな……」

「何かこいつら普通のコボルトより強くな～い？」

「しかし魔法の耐性は低いようだな」

「おい、オーガ」

振り向くとそこには隊長がいた。

「お前が魔王の息子ってのは本当なのか？」

「ええ、本当ですよ。だから俺はお尋ね者にされてるんすよ？」

「そうか……。まあ、お前が誰の息子だろうと関係ない。近衛隊を抜けるのならばこの書類にサインをしろ」

そう言って隊長は俺に近衛隊脱退の書類を渡してきた。ていうか――

「隊長、俺を捕まえに来たんじゃないんすか？」

「バカを言え、俺は部下を裏切るような真似はしない！近衛隊をやめるなら正式にやめるんだな、ほらリジーも魔導兵団の隊長から貰って来てやったぞ」

今度はリジーに書類を投げる。

「あっはは～……全てお見通しだったんだねぇ～」

「当たり前だ俺を誰だと思ってる？では、俺は帝国に戻る」

「「はい、近衛隊長！」」

俺とリジーは敬礼して隊長を見送った。

「さぁて、これで本格的に帝国から追われる身になったわけだ」

「何かゾクゾクするねぇ～」

「そなたらは本当に呑気だな……」
「……おいてめぇら！」
俺達が足元を見るとそこにはコボルトが倒れていた。
「ん、まだいたのか？」
「しぶとい奴だ……」
「いい加減あきらめなよぉ～」
「うるせぇ！もうすぐここに俺達のボスがやってくる、そしたらお前らなんて一捻りだ！ひゃっはっは！お前らもお終いだな！ひゃっは――」
ゴンッ！
「うるせぇ」
「しかし、コボルト軍団のボスねぇ～……どんな奴なんかな？」
「フィア、近くにいるか慧眼で見てくれないか？」
「うむ、わかった……む！？オーガ上から来るぞ！」

「うおっ！？」

ズドォォォォン！！！

俺が慌てて横へ飛ぶと俺がいた場所には巨大なクレータが出来ていた。フィアが気づいてなかったら俺はぺしゃんこになっていただろう。

「チッ外したか……」

「こいつはサイクロプス！」

「フィア！こいつもか？」

「うむ、どす黒い力が渦巻いとる」

てことは……。

「サイクロンパーンチ！」

ドォォォン！！！

サイクロプスは俺に殴りかかって来たがスピードがないから俺は簡単にかわすことが出来た。にしても技名もふざけてるが威力はもっとふざけてやがる……こんなのくらったらひとたまりもねぇな。

「そんなテレホンパンチあたんねぇよ！」

俺はサイクロプスに向かって斧を振り上げた。サイクロプスはそれを――

ビュン！

――いとも簡単にかわした。

「なっ！？」

「サイクロンキィィック！」

バキッ！！！

「がはっ！」

一発目とは段違いのスピードで蹴り飛ばされた俺は広場の銅像に

叩きつけられた。

「オーガ！」

「ぐはは！貴様ごときが俺様に敵うわけねぇだろ？」

「悪いがこっちも本気で行くぜ！？ＢＵＲＳ――」

ガシッ！

俺が魔魂召喚しようとした瞬間サイクロプスに頭を掴まれた。

「っ！」

まずい、これじゃ魔魂召喚できねぇ！

「ぐはは！握りつぶしてやる！」

「オーガを離すのだ！？ＩＣＥ！？」

「とうっ！」

ガシャァァン！

「はぐぁっ！」

「なぬっ！？」

フィアは俺を助けようと氷の玉をサイクロプスに投げつけたがコボルトにそれを阻まれた。ヤベぇ意識が……。

「大丈夫かオーガ！？ＢＵＲＳＴ！？」

俺の意識が飛びそうになった時、ヘブラスの声が聞こえた。

「グルァァァァ！」

バンッ！

「ぐあっ！」

そこには紫色の猫ではなくサイクロプスよりでかい魔獣【ベヒーモス】がいた。

「今だオーガ！」

「サンキュー！？ＢＵＲＳＴ！？」

「何だと！？」

「おらぁぁぁぁ！」

ザンッ！　プシュゥゥゥゥ……

俺がサイクロプスを斧で切った瞬間切り口から黒い靄（もや）のようなものが飛び出して消えた。

「あれがフィアの言ってたどす黒い力のもとらしいな」

「う～ん、あたしもあんなのはじめて見たよぉ～」

「む、コボルト達からも黒い靄が出ておるぞ」

見るとコボルト達からも黒い靄が出ては消えていた。

「どうやらボスを倒すと子分達からも出て行くようだな」

「ん、俺様は一体何をしていたんだ？」

どうやらサイクロプスが起きたようだ。傷口も見当たらなくぴんぴんしているみたいだ。

「おい、大丈夫か？」

「ああ、一体何があったんだ？」

いろいろ、説明すんのも面倒だったからかなり端折って説明したらサイクロプスとコボルトは村長に平謝りし、これからは村の仕事を手伝うと言い出した。結構いい奴らだったんだな。

「それにしてもまさかヘブラスがベヒーモスだとは思わなかったぞ」

「まあね」

「そういやヘブラス、俺気に入った魔獣ならいたぞ」

「ん、どいつだい？」

キョロキョロとあたりを見渡すヘブラス。いや、俺が気に入ったのは――

「――お前だよ」

「へ？おいら？」

「ああ、俺とは気が合うし戦闘力も申し分ねぇ。俺にはぴったりの使い魔だと思うが？」

「あははっ、おいらは高いよ？」

「いくらぐらいだ？」

「１００万Ｑ【クオンティティー】でどうだい？」

高ぇよ！まあ、冗談なのはわかってんだけどよ。
「ケフィア3本でどうだ！」
「うーん、もう一声！」
「じゃあ、5本！」
「よし！契約成立！」
「そなたらはどれだけケフィアが好きなのだ……」
いや、健康にもいいしうまいじゃん。
「しかし、お前は本当に凄い見た目してるな……」
鋭く尖った長い2本の角に、むき出した牙、背中から飛び出ている棘に、ぶっとい尻尾、なぜか物凄く親近感が湧くんだが……。
「いやぁおいらこれでも魔王の相棒だからね。でも――」
そこでニヤリと笑いヘブラスは元の紫色の猫の姿に戻って言った。
「――これからは勇者のパートナーだけどね」
「ああ、よろしくな！」
こうして、ヘブラスは俺の使い魔になった。
「あのさぁ～盛り上がってっとこ悪いんだけどさぁ～……」

「どうしたリジー？」
「その猫、誰？」
ああ、そう言えばリジーはあの時店にいなかったんだったな。
「ああこいつはヘブラス、親父の使い魔だったんだ」
「へぇ～魔王の契約者ねぇ～……。あれ、儀式はもうしたの？」
「儀式？」
「ああ、おいらは魔王専属の魔獣だから儀式はいらないんだよ」
「あ、そうゆうもんなのか？」
「その証拠に手の甲にベヒーモスの紋章があるだろ？」
ああ、これベヒーモスだったのか。
「王族っていうのは特殊な紋章が生まれつき体に出るもんなんだよ」
「はぁ、全然知らなかったなぁ」
「ま、趣味で入れてる奴もいるんだけどね」
「契約者との契約が切れた時、自動的に血縁者に契約が行くというのは私も知っておったぞ」

フィアが自慢げな顔で言う。いや、そんなドヤ顔で言われても……。

「そういや俺達が契約所言ってる間、どこ行ってたんだ？」

「ん～服屋だよぉ～、耐熱性の洋服がこれしかなくって――って契約所行ってたの！？」

ややこしいことになる前に俺とフィアとヘブラスはことのあらましをリジーに話した。

「あぁ～そうゆうことだったのねぇ～。村長さんに謝んなきゃなぁ～……」

「ま、いいじゃないのかい？ジョーズが謝ったってことは本人が非を認めたんだからさ。おいらは村長として頭を下げたジョーズの気持ちを考えれば謝る必要はないと思うよ。ただ認めてあげればいいんだよ」

「……うん、あんがとねヘブラス」

これでひと段落だな。まあ、もうこの村にいる理由もないし――

「さっさと出発するか！」

「いや、今日はもう疲れた。これから出発など無理だ」

「そうだねぇ～もう日も暮れるしねぇ～」

例によって例のごとく2人がまた旅にブレーキ掛けてやがる。

「お前らはまたそんなことを――」

「いいじゃないのかい？村長に頼めばただで旅館に泊めてもらえると思うし」

ヘブラス、お前まで……。

「呼びましたか？」

「うおっ！？」

どっから現れたのか、俺の隣にはいつの間にか村長がいた。しかし、サメの着ぐるみに着てカウボーイハットでよくそんな早く動けるな……。

「ジョーズ、今日旅館に泊まりたいんだけど」

「ええ、皆さんには村を救っていただきましたからもちろん無料でどうぞ！」

「「「やったぁ！」」」

……今夜も素振りでもするか。

第四話　魔王の契約（後書き）

というわけでヘブラスがオーガの使い魔となり旅の仲間も増えました！

今回もちらっと魔王と勇者のお話が出ましたが、外伝でもそろそろ魔王の話を書こうと思っているのでよかったら外伝の方も見ていただけるとうれしいです＾＾。

第五話　Let's Shopping!

『ネメシスお願い、あたしを乗せて街まで飛んでよ～』

『……叱られるのはわしなのじゃぞ？』

『大丈夫どんなことがあってもあたしがネメシスを守る！』

『はぁ……そこまで言われたら断れんな？ＷＩＮＧ！？』

『わ～い、ありがとうネメシス！』

『いいから早く乗るのじゃ、父君にバレたら洒落にならんぞ？』

――どんなことがあっても守るって約束したのに……。

『早く逃げるのじゃ！ゴボッ！』

『ネメシス！？』

『わしは大丈夫じゃ……さあ振りかえらずにどこまでも逃げるのじゃ！』

『ネメシスゥゥゥゥ！』

――あたしは大切な使い魔1人守ることも出来ないんだ……。

「――っ！」

あたしがベットから飛び起きるとそこは旅館の部屋だった。二段ベットの上で寝ていたあたしは下の段で寝ているチビを起こさないようにそーっと降りた。

「……もう食べられんぞ……」

夢ん中でも飯食ってんのかよ……。あんなに食うのに何でこいつはチビのまんまなんだろ？

「……オーガは起きてんのかなぁ～？」

音をたてないようにドアを閉め、外に出てみると――

ブォン！　ブォン！　ブォン！　ブォン！

――案の定オーガは外で斧を振っていた。

「本当に体力バカだねぇ～……」

帝国軍にいた時からこいつはこうだ。

『何でそんなに素振りしてんのぉ～？』

『素振りしてる時は何も考えなくていいからな、お前もやったらどうだ？』

『あたしは魔導兵だっつぅ～の』

『そうか、俺は近衛兵団所属オーガ・ザントマンお前は？』

『あたしは魔導兵団副隊長リジー・サラマンダーよろしくねぇ～』

『ああ、よろしくな』

それにしてもよくあんな巨大な斧ふれるなぁ～……。

「ん、リジーじゃねぇか？」

「やっほ～」

「ケフィア飲むか？」

そう言ってあたしの方にケフィアの入ったペットボトルを投げてくる。

「あんがと」

オーガは昔からケフィアばっかり飲んでるなぁ～……。

「眠れないのか？」

「まぁ～ね」

「それじゃ――」

「言っとくけど素振りはしないよ？」

「おお！何で俺が言おうとしたことがわかったんだ？」

こいつは本当にバカだと思う。

「まあいいじゃん、それよりあたしと戦わない？」

「おお、いいねぇ。んじゃ手加減はしねぇぞ！？ＢＵＲＳＴ！？」

「こっちも本気でいくよぉ～？ＦＩＲＥ！？」

ま、それがこいつのいいとこなんだけどね。

「ふぁあ……眠ぃ……」

「あたしも……」

＊

結局昨日はリジーと朝まで戦っていた。しかし魔魂召喚した俺と対等に渡り合うとは……。

「そなたらは一体何をしておったのだ？」

1人だけぐっすりと眠っていたフィアは隈だらけの俺達を見て不思議そうな顔をしていた。てか俺、2日続けて徹夜じゃねぇか……。

「さすがに眠すぎる。俺は寝る、昼になったら起こしてくれ」

「うむ、わかった」

「じゃあ、あたしは武器屋見てくる」

「それでは私は食べ物を見てくる」

――そんでもって昼

「オーガ、起きるのだ！」

「……うーん、あと一時間……」

「何を言っているのだ！昼に起こせと言ったのはオーガであろう！」

「……眠い」

「ならば……？ＩＣＥ！？」

ガシャァァン！！！

「ぐはっ！」

「目は覚めたか？」

「ああ、むしろ永眠しそうな勢いだったが……まあいい、起こしてくれてありがとな」

「頼まれたことをするのは当然のことだ、気にするな」

そう言いつつ手でポニーテールの先をいじってるフィア。……こいつ喜んでるな。

「で、買い物は済んだのか？」

「うむ、食糧は買い込み済みだ。ドデカミンは武器まだ武器屋を見ているようだが……」

リジーはまだ武器屋見てんのか。

「じゃあ、とりあえずそっち行くか」

「うむ」

――武器屋

「お～オーガ、やっと起きたのかぁ～」

「……おかげさまでな」

「それよりオーガ、砥石ってどれ選べばいいのぉ～？」

それでそんなに時間かかってたのか。

「この店は結構いい砥石が揃ってるな……お、これはビトリファイド製法で作られた砥石だな」

「「ビトリファイド製法？」」

「知らないのか？ビトリファイド製法ってのは研磨剤にガラス質の結合材を混ぜ、乾燥させて１，３００℃近辺の高温で焼結して作る製法のことだぞ。しかも変質に強くて研磨力に特化した砥石を作ることができるんだ」

ま、硬いと修正が面倒なのが球に傷だけどな。

「なぜそんなに詳しいのだ？」

「え、常識だろ？」

「「……」」

俺何かまずいこと言ったか？

「さぁて、耐熱性の鎧でも見ようかなぁ～」

「私は閃光弾などを見るとしよう……」

俺はさりげなく逃げようとする2人を呼びとめた。

「ちょっと待て、砥石を買わないと武器の手入れができねぇだろ！」

「じゃあ～オーガが選んでよぉ～」

「うむ、それがよい」

面倒事押し付けやがって……。

「おーい店長、レジンボンド系ダイヤの砥石はあるか？」

「もう突っ込まんぞ……」

「いちいち反応してたら限が無いからねぇ～」

ちなみにレジボンド系ダイヤってのは天然や人工のダイヤを混ぜて出来るダイヤモンド砥石だ。ま、細かい製法はめんどいから割愛するぞ。

「はい、こちらにあります」

そして、店長は店の奥からレジボンド系ダイヤの砥石を持って来た。

「すげぇな、これはあんたが作ったのか？」

「ええ、父が砥石職人だったもので私もその影響で」

「そいつはすげぇないくらだ？」

「実はこれは私が趣味で作ったもので売り物ではないのですよ」

「いや、こんな上等品を帝都で買ったら2万Qはするぞ！？」

趣味でこんなもの作る店長は何者なんだよ……。

「そこまで言っていただけると光栄です。もしよかったら貰っていっていただけませんか？」

「いいのか？」

「はい、是非旅に持っていってください」

こうして、武器の買い物を終えた俺達はなぜか服屋に行くことになった。

「何で服屋に？」

「あんたら、自分の格好見てみなよぉ～」

そう言われて改めて俺とフィアは自分の格好を見てみた。俺はボロボロの鎧、フィアは青いドレス、ぶっちゃけ歩きにくいだろう。

「何か問題があるのか？」

「問題だらけだな」

「でしょ～」

まあ、逃亡生活で余裕がなかったからな。
「で、どうするんだ？」
「チビ、メイドのイカタコさん呼んでぇ～」
「うむ、クララ出てきてくれ」
「お呼びでしょうか姫（笑）？」
「うむ、ドデカミンが用があるそうだ」
「何でしょうか、お――？」
「ストォォォップ！？」
「あらどうしました？」
「その呼び方はやめてねぇ～？」
何だ何だ？リジーの奴しゃべり方はへらへらしてるが目が笑ってねぇぞ。
「しかし、他に呼び方が思い当たらないのですが……」
「何でもいいよ！」
「では、エリ――」

「――あんたわざとやってるでしょ～？」
「うふふ♪何のことでしょうか？」
何か知らねぇが両者の間で火花が散っている。
「まあ、じゃじゃ馬（笑）と慣れ合うのはこの辺にしておきましょう」
「このイカタコ女ぁ～」
「ふっ、わたくしに用があったのではないですか？」
「ああ、服のことなんだけ――」
「――言わなくてもわかっていますわ、洋服選びを自分のセンスがあまりにもお粗末だからわたくしに手伝って欲しいのですね？」
「本っ当にむかつく女だなぁ～！」
本当に面倒くさい奴らだ。
「んじゃ、俺の服を選んでくれ」
「王子（仮）はジーンズでも穿いていればいいのでは？」
服選びをクララに頼んだらばっさり切り捨てられた。こいつ、まだこないだのこと誤解してるな。
「言っとくけどあの時のはケフィアだっ――」

「――知ってますわ。でも、王子（仮）はジーンズが一番似合いますよ」

「いや、上は何着ればいいんだよ」

「はぁ……面倒くさ――適当に選んでおきますね」

こいつ、今面倒くさいって言おうとしたよな？

結局、クララは中央にでっかく鬼とプリントされた黒いＴシャツとデニムジャケットを持ってきた。

「ありがとな」

「では次は姫（笑）の服を」

聞いちゃいねぇな。

「うふふふふ♪腕が鳴りますねぇ」

「……オーガ助けてくれ、今のクララは何かがおかしい」

いや、さすがにこんな楽しそうなクララを邪魔できねぇよ。

「俺はもうイカ足でひっぱたかれたくないんだ」

「薄情者ぉぉぉぉ……」

そして、フィアはクララのイカ足に捕まり試着室に連行されてい

った。

――数分後

「ま、待つのだ！この服はちょっと――」

「何をおっしゃいますか！素敵ですよ姫（笑）！」

「しかし、これは――」

「ほらほら恥ずかしがらないで王子（仮）も喜びますよ」

クララはそう言うと試着室のカーテンを開けた。

「フィアか！？」

そこには白いミニスカートに空色のベアトップを着たフィアの姿があった。

「ほーら王子（仮）も大喜び」

「お、オーガ、おかしくないか？」

フィアは顔を真っ赤にして聞いてきた。おそらく、露出の多い格好だから恥ずかしいんだろう。

「あ、ああ……」

……俺もびっくりし過ぎてしどろもどろになってしまった。

「どうされました王子（仮）？」

クララはニヤニヤしながら俺の方を見ている。こいつほんといい性格してるよな……。

「いや、いいんじゃないか？俺は可愛いと思うぞ」

「か、かか、かかかかか可愛いだと！？」

「動揺しすぎだろ……」

まあ、そうゆうことに慣れてねぇから仕方がないか。

「ちょっと～耐熱服他にないの～？」

「申し訳ありません。オーダーメイドとなると3日はかかるかと……」

「えぇ～そこを何とか……」

リジーは戦う時全身に炎を纏う。よって服も耐熱性のを着なきゃいけねぇから全部オーダーメイドとなる。むしろ今こいつが着ているピンクのキャミソールにデニムのスカート、白い帽子があることが不思議だ。

「安心しろお嬢さん、俺様が配達してやるよ」

「「「何してんのお前！？」」」

いつ来たのか店内にはサイクロプスのクロップがいた。てか、こ

の村の奴らは本当神出鬼没だな……。

「いやぁオーガの旦那に正気に戻してもらったあとにこの村で働くことにしたんだけどよぉ、やっぱ俺の馬力とスピードを生かした仕事っつたら配達しかねぇからな」

「あんがと～じゃお願いね」

「旅先に配達するんだったらこれを持っていてくれ」

そう言ってクロップは魔法陣の書かれた羊皮紙をリジーに渡した。

「これは？」

「その魔法陣が書いてあるとこに俺は向かうから」

なるほどＧＰＳ魔法陣か。

「しっかし、お前雰囲気変わったなぁ」

黒い靄に乗ったられた時は目が赤く光ってたからな。

「まあ、とりあえず買い物も済んだことだし出発するか」

「わ、私はこの格好で行くのか！？」

「いや、前より動きやすいだろ？」

「何かスースーして落ち着かんのだ……」

まあ、ミニスカートだからな。

「俺は結構いいと思うんだけどなぁ……」

「ふぇ！？」

あ、やべ。

「あらまぁ……ぷっ、くくく……」

「とりあえずクララは魔魂水晶に戻れ」

「おーいチビ、大丈夫かぁ～？」

「……結構いいと思う……結構いいと思う……結構いいと思う……結構いいと思う……」

「だめだこりゃ」

フィアはプシュゥゥと音が聞こえてきそうなほど真っ赤になり、その場に倒れた。

「仕方ねぇ、俺がおぶってくか……」

こうして俺達はインディ村を後にした。

――村を出て歩くこと1時間

「ヘブラス、契約所の方はどうするんだ？」

「ジョーズが代わりにやってくれるみたいだよ」
「大丈夫なのか？」
「店の連中もジョーズが大好きだからね」
村長の人徳は底知らずだな。
「むう……ここは？」
「おお、目ぇ覚めたか？」
「うむ、何とかな……」
「歩けるか？」
「もう大丈夫だ」
そう言って俺の背中から降りるフィア。
「しかし、俺達はどこへ向かってるんだ？」
「う～とね次は……」
リジーは村長に貰った地図を首を捻りながら見て言った。
「次はノッカー鉱山だねぇ～」
ノッカー鉱山かよ……。

「オーガ、なぜそんなに疲れた顔をしておるのだ？」
「いや、ノッカー鉱山は確か罠だらけの山って隊長が前に言ってたんだよ」
「罠だかけかぁ～何かわっくわくするねぇ～」
「お前は呑気だな……」

ガサガサッ！

「「「っ！」」」

突如道の横の茂みから物音がしてそっちを見ると――
「しっかしここら辺の道は複雑でござる……」
――侍がいた。
「む、ちとそちらの御仁」
「何だ？」
「拙者は港町ヴォジャノーイに向かっておるのだが道に迷ってしまってな、よかったら道を教えていただけないだろうか？」

「ああいいぞ、地図を見せてみろ」
地図を見てみると俺達と同じ地図だったから行先も同じだった。
「ここから真っすぐ行くとノッカー鉱山があるから――」
「――おお！ここの道をまっすぐ行けばよいのでござるな、かたじけない」
俺の話を最後まで聞かず侍は去って行った。……茂みの方に。
「真っすぐか？」
「ある意味真っすぐだな」
「茂みの方にねぇ～」
あいつちゃんと街に着けるのか？
「まあ、人のことを気にしてもしょうがねぇな」
「うむ、ではノッカー鉱山に向けて出発！」
「いや、もう出発してるけどねぇ～」
「別にいいであろう、気合を入れるためだ」
「チビが気合ねぇ～……ぷっ」
「な、何がおかしいのだ！」

「いや、別にぃ～……ぷっ」

「笑うな！」

この時、俺が【あんまり大きな声を出すと大岩が転がってくるからね！】と書かれた看板に気が付いていれば、もっと冷静に2人を止めていただろう。

「おい、お前らいい加減にしろ！」

ゴゴゴゴゴゴ……

「ん、何か物音がするな」

「うん、あたしも聞こえるよぉ～」

「まさか――」

ゴゴゴゴゴゴ！！！

俺達が上ろうとしていた山道から大岩が転がってきていた。

「ヤッベ、逃げるぞ！」
「今のは絶対オーガのせいだな！」
「オーガのバカ野郎ぉ～！」
「くそっ追いつかれる！」
「凍らせて止める！？ＦＲＥＥＺＥ！？」

カチーン――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

フィアが大岩を凍らせ一瞬止まったように見えたが、重さに耐えきれずまた転がって来た。
「だめじゃねぇか！」
「てゆ～かもっとでかくなってんじゃん！」
「うぅ……すまぬ」
「そんじゃ俺が行く！？ＢＵＲＳＴ！？」
俺は魔魂召喚するのと同時に背中の棒きれを抜き斧に変化させる。

「行くぜぇぇぇぇ！」

ズドォォォォン！！！

俺が斧で大岩を砕くとそれは大粒の礫となって俺達に降ってきた。

「リジー！」

「あいよぉ～！？ＢＵＲＮ！？」

ボウッ――ヒュゥゥゥゥ！！！

「加速してんじゃねぇか！」

「あっれぇ～おっかしいな……」

「これでは完全に避けられぬ！」

万事休すかと思ったその時――

「？迅雷歩！？」

ザァァァァン！！！

「ふぅ、大丈夫でござるか？」

――さっきの侍が俺達の前に立っていた。

第五話　Let's Shopping!（後書き）

どうも、Ｌｅｎｂｉｒｄです！
今回もこの小説を読んでいただきありがとうございます！
ブログを始めたのでそちらも見ていただけると嬉しいです！
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｐｏｋｅｍｏｎｂｗ_ｒｉｏ

人物紹介　その3

ヘブラス……かつて魔王の使い魔だった魔獣ベヒーモス。普段は紫色の猫の様な見た目をしているが、オーガと同じく【ＢＵＲＳＴ！】と叫ぶと本来の姿に戻る。インディ村で使い魔契約所の店長をしていたが、オーガと契約し旅に出る際に店は村長に任せた。
特徴：紫色の猫、魔魂召喚時は鋭く尖った長い２本の角に、むき出した牙、背中から飛び出ている棘に、ぶっとい尻尾。オーガ曰く親近感が湧く。
好きなもの：魔王、オーガと同じくケフィア
嫌いなもの：先代の勇者

第六話　島国日和の侍剣士

「いやぁ～危ないとこだったなぁ～」

「本当に死ぬかと思ったぞ……」

「ま、俺だったらあの程度じゃ死なないけどな。それより助けてくれてありがとうな」

「いやいや、礼には及ばんでござるよ」

「お前、名前は？」

「拙者は虚原龍之介（うつはらりゅうのすけ）と申す。貴殿らは？」

「俺はオーガ・ザントマンだ」

「私はフィア・フロスト」

「あたしはリジー・サラマンダー、よろしくねぇ～」

「オーガ殿にフィア殿にリジー殿でござるか。こちらこそ以後よしなに」

虚原龍之介って名前と着物を着て髪を後ろで結い、腰に刀を差してることから恐らくこいつは日和の国出身だな。

「お前は見たところ日和の国出身のようだが、何でこんな所にいるんだ？」

「おお、拙者が日和の出身とよくわかったでござるな！」

いや、見ればわかるだろう……。

「てか、名前難しい……リュウって呼んでいいか？」

「あざ名なら大歓迎でござるよ」

「そうか、んじゃ改めてよろしくなリュウ」

「リュウ、そなたはなぜヴォジャノーイに向かっておるのだ？」

「拙者は濡れ衣で島流しにされてしまったのでござるよ」

「「「島流し？」」」

何だそれ？

「この大陸には島流しの刑は無いのでござるか……。日和では罪を犯した者を罰するため島から追い出す刑があり、それが島流しの刑でござるよ」

要は犯罪者を遠くに追いやって戻って来れなくするわけだ。

「で、濡れ衣ってのは？」

「ま、それはいろいろ諸事情があったのでござるよ」

つまり人には言えない事情か。

「まぁ～何でもいいじゃ～ん。旅は道ずれ世は情けっしょ？ん、どったのオーガ？」

「……いや何でもねぇ」

俺の台詞が……。

「それより、ノッカー鉱山を越えねぇと行けねぇのは俺達もリュウも一緒だろ？だったら一緒に行かねぇか？」

「いいのでござるか？」

「さっき俺達助けてくれたろ？遠慮すんなって」

「うむ、私は別に構わぬが……」

「あたし達お尋ね者なんだよねぇ～」

「何、その程度のことなら気にしないでござるよ」

「んじゃ、行くか」

俺達はこの後ノッカー鉱山の罠に気を付けつつ山道を通り、無事鉱山内部にたどり着いた。

「ねぇ～オーガ、何で鉱山なのに罠だらけなの？」

「簡単な話だ。ここが、珍しい鉱石ばっかが出る鉱山だからだよ」

ノッカー鉱山はダイヤモンドやエメラルドなどの珍しい鉱石がかなりの大きさで出る鉱山だ。好き勝手に掘り返されちゃ困るだろ。

「しかし、誰が罠を仕掛けているのでござるか？」

「おそらく、この鉱山の権利を所有している奴かもしくは――」

「――この鉱山に住み着く魔族か妖精だな」

また俺の台詞が……。

「む、どうしたのだオーガ？なぜそんな泣きそうな顔で私を見るのだ？」

「いや、もういい……」

そんなこんなでしばらく歩くと3本の分かれ道に差しかかった。

「む、分かれ道だな」

「ああ、そうみたいだな」

「ふむふむ……『採掘プレイの道』『謎解きプレイの道』『狩人プレイの道』と書いてあるでござる」

「ねぇ～どこから突っ込めばいいのぉ～？」

「「お前が突っ込み！？」」

「……2人共燃やしていいかなぁ～？」

「まあまあ、落ち着くのでござるよ」

で、どの道を選ぶかだが――

「俺は『狩人プレイの道』だな」

「「言うと思った……」」

「オーガ殿は血の気が多いでござるなぁ」

「え、だめ？」

「「却下」」

「この道ならややこしい罠もねぇだろうし簡単だろ？」

「オーガ……魔獣だらけで手がつけられなくなる可能性を考えるのだ」

「1匹とは限んないでしょ～……」

「じゃあ、どうするんだよ？」

「『採掘プレイの道』でいいっしょ？」

「確かに採掘ポイントがあるならば鉱石を採掘しつつ前に進めるでござるな」

確かにそうなんだが……。

「ぶっちゃけ、この道が1番危ねぇだろ」
「私も同感だ」
「えぇ～何でよぉ～？」
だってこの鉱山が罠だらけなのは鉱石を取られたくねぇからだろ？
「どう考えてもこの分かれ道からして罠だろ」
「私としては『謎解きプレイの道』が1番安全だと思うぞ」
「どうして？」
「簡単な話だ。誰もこの道を選ばなそうだからだ」
「「「ああ、なるほど」」」
こうゆう時のフィアは誰よりも頼りになるな。
「この道ならばどうせ大した罠もないであろう」
――というわけで『謎解きプレイの道』に入った俺達だったが……
「……なぁ大した罠はないんじゃなかったのか？」
「……他の道よりはマシだったはずだ」
「まあどうゆう罠かの説明が書いてあるだけマシじゃ～ん」

「この道は罠をどう回避するかが要ということでござるな」

俺達はおそらく罠が出てくるであろう部屋の前の看板で立ち止まっていた。看板には『上から来るぞ気をつけろ！』と書いてある。

「鬼が出るか蛇が出るか……とりあえずこのボタン押してみるか」

ポチッ！

「グォォォォ！」

「おお！本当に鬼が出た！」

「なぜそなたはそんなに嬉しそうなのだ……」

「さすが戦闘狂だねぇ～」

「グォォォォ！」

ドンッ！　バキッ！　メキッ！　バコッ！

「ふぅ、片付いたな♪」

「屈託のない笑顔で鬼を叩き潰す奴は初めて見たぞ……」

「拙者にはオーガ殿の方が鬼に見えるのでござるが……」

「鬼というより悪魔だよねぇ～まあ、魔王子だけど……」

「くだらねぇこと言ってねぇで次行くぞ」

しかし、一々部屋を用意してまで罠を仕掛けるとは……もうこれ仕掛けた側の趣味じゃねぇか？

「む、次は迷路か。ならばここはクララの出番だな」

「お呼びでしょうか姫（笑）？」

「クララ、迷路の道を足や髪を伸ばして探って欲しいのだが」

「かしこまりました」

そう言ってクララは迷路の先に髪やタコ足を伸ばした。

「イカ足は使わないのか？」

「この足は敵を攻撃するためのものですから」

「そ、そうか……」

つまりあの時の俺は敵認識だったと……。

「つーかめんどい。壁壊せばいいだろ」

ドゴッ！

「ほら、さっさと行くぞ」

「迷路の意味ないじゃん……」

「早く前に進めるのはありがたいでござるがな」

「クララ、何かすまぬ……」

「いいえ、お気になさらないでください姫（笑）。王子（仮）の脳みそが筋肉で出来ていただけのことですわ」

「結構気にしているのだな……」

次に俺達が着いたのは部屋ではなく廊下だった。

「この廊下、坂になっておるな」

「またでっかい岩でも転がってくんじゃなぁ～い？」

「お、こちらにくぼみがあるでござるよ」

「つまり岩が転がって来たらそちらに隠れろということでしょうか。ボタンを押すタイミングと岩が落ちてくる距離を計算するとボタンを押す人が逃げられるかはギリギリですね」

「ま、とりあえずボタン押すぞー」

ポチッ！　ゴゴゴゴゴゴ！

転がって来たのは岩ではなく鉄球だった。

「お、オーガ！？早くくぼみに――」

「何だ鉄球か、岩じゃねぇなら飛び散らねぇな」

ドゴォォン！！！

「さ、次行くぞー」

「謎解きプレイと言うより謎解きレイプですわね……」

「「「激しく同意（でござる）」」」

結局その後も謎解きプレイ０で罠を突破し鉱山の奥の方まで辿り着いた。

「何だ楽勝だったな」

「で、ここからの道はどうなっておるのだ？」

「地図にはここから先は確か――」

「――動くな！」

「「「「っ！？」」」」

振り返ると大柄な男達がフィアの首元にナイフを突き付けていた。

「ったく、いきなり何だよ……」

「黙れ！こいつの命が惜しければ着ぐるみ全部置いていけ！」

「それを言うなら身ぐるみだろ？」

「え、マジで？……こいつの命が惜しければ身ぐるみ全部置いていけ！」

ご丁寧に言い直しやがった。

「おい、フィア何ぼさっとしてんだ。早くそいつら蹴散らし――フィア？」

明らかにフィアの様子がおかしい。顔を真っ青にして震えてると

こみるとまさか――

バシッ！

「ぐはっ！」

俺の横を物凄いスピードで白いものが通過した。……まあ、クララのイカ足なんだけどな。

「あらまぁ、上半身が壁にめり込んでしまいましたねぇ。次は力の加減が出来なくなるかも知れませんよ？」

怖ぇ！何このクララめっちゃ怖ぇ！いつも以上に笑顔なのに声が笑ってねぇ……。

「ば、化け物め！」

「ええ、化け物ですわよ。でも、その化け物の主に手を出したのはそちらでございますよ。覚悟は出来ていますか？」

そして、クララは残りの賊を一瞬でブチのめした。

「世話をかけたなクララ」

「いえ、それはいつものことなので。それより王子（仮）、ちょっとよろしいですか？」

「お、おい、どこに連れてく気だよ？」

そのまま、俺はクララにタコ足で連行された。……イカ足じゃない分信用されてるってことか？

「何だよ急に……」

「姫（笑）のことでお話があります」

「フィアのことで？」

「王子（仮）はもうお気づきなのかも知れませんが姫（笑）は男性に対して耐性がないのです」

まあ、薄々感ずいてはいたんだがな。俺が初めて会った時に肩を掴んだら吹っ飛ばされるし、俺が服をちょっと褒めただけで気絶したしな。

「やっぱり、１０年間の封印がでかいのか？」

「それもありますが……フロスト王国の王スピット・フロスト様は知っていますか？」

「ああ、知ってるぞ」

確か親父が俺の魔魂水晶を預けてた人だよな。

「魔王様とは本当に仲が良くて当時ご主人様にお仕えしていたわたくしも魔王様には本当にお世話になり――って話が脱線しましたわ

ね、詳しいことは言えないのですがあの子は王国で姫として育てられてきたために生まれた時から城で勉強ばかりさせられて友人も一人もいなかったのです。まあ、家庭の事情ってやつです」

クララがフィアを姫（笑）以外で呼ぶのは初めてだな。

「つまり何か、フィアは１０年間どころか生まれた時から外の世界から隔離されてたのか」

「そうゆうことになります」

で、男は親族以外では俺が初めてってわけか。

「しかし、あれじゃ今後旅する上で支障が出るな」

「ええ。ですから王子（仮）、姫（笑）をよろしくお願いします」

「ああ、任せろいざとなったら俺がフィアを守る」

「頼もしいですね。では――」

そう言って、クララはイカ足でもタコ足でも、ましてや髪でもなく正真正銘自分の右手の小指を俺の方に出した。

「指切り拳万嘘付いたら針千本飲ました揚句に体中をタコ足で締めあげイカ足でボコ殴りにして髪の毛で首を締めあげ全身原形がわからなくなるまで痛ぶってあげますわ」

「……ああ、絶対約束は守る」

俺は今日ほど守らなければならない約束が出来た日はない。
「俺としては他にも聞きてぇことがあるんだけどな」
「何でしょう？」
「お前の嫌いなもののことだ」
「っ！？」

ヒュンッ！　ガシッ！

俺が質問した直後にイカ足が飛んできた。俺はかわさずそれを受け止めた。
「聞かれたくねぇ話だってのは承知の上だ。だが俺はお前のことを仲間だと思ってる、だから教えてくれ！何で海が嫌いなんだ？」
「……」
クララはしばらく俯いて黙っていたが顔を上げて話し始めた。
「わたくしがクラーケンとスキュラのハーフだというのは知っていますね？」
「ああ」

「少し昔話をします――」

――昔、父クラーケンは海の怪物として人間、妖精、そして他の魔族にも恐れられていました。クラーケンには理性は存在せずただ目の前にある物を破壊し続けたのです。しかし、そんな父にも一欠片の理性が生まれました。母キーラ・オクタスと出会ったのです。父は本能を鎮めるために陸に上がって母と暮らすことを決意しました。そして、わたくしが生まれたのです。ですが、幸せな日々はそう長く続きませんでした。ある時人間が父の正体を知り殺しに来たのです、化け物退治という大義名分を抱えて。わたくしと母を守るために父は囮になり人間達を引きつけていたのですが、誤って崖から海に落ちてしまったのです。その瞬間に父の理性は消え、本能のままに目の前の人間達を殺していったのです。わたくしや母も例外ではありませんでした。父は荒れ狂うイカ足で母の心臓を貫き、わたくしの方にもイカ足が伸びてきました。しかし、父はわずかに残った理性で自分のイカ足で自分の命を絶ったのです。そして、海に入ると本能のままに破壊衝動に襲われるクラーケンの血はわたくしにも流れているのです――。

「これが私が海を嫌う理由です」

「でも、実際に暴走した訳じゃねぇんだろ？」

「……そうだったらどれほどよかったか」

クララの顔を見ると目にうっすらと涙が浮かんでいた。

「まさか実際に？」

「ええ、海岸で波にさらわれている子を助けようとした時に……」

クララはそれ以上は何も言わなかった。

「んじゃ、そろそろ行くか」

「ええ、姫（笑）達を待たせてはいけませんね」

そして俺達はその場を後にした。

「遅いぞ！何をしておったのだ？」

「まあ、いろいろと話をな」

「姫（笑）、わたくしは少々疲れましたので魔魂水晶に戻ります」

「うむ、御苦労であったな」

そしてクララはフィアの胸元にあるペンダント型の魔魂水晶に戻って行った。

「それじゃあ、先に進むか」

「うむ、早くこの罠だらけの山を抜けなければな」

「じゃあ、オーガが壁ブチ抜いて行けばいいんじゃなぁ～い」

「おお、ナイスアイディア！」

「待ってくだされ、そんなことをしたら鉱山自体崩れ落ちますぞ」

「そなたらは本当にバカだな……」

結局この日は山を抜けることなく適当に安全な場所で寝ることになった。

＊

『今日からわしはおぬしの使い魔じゃ、よろしくな』

『へぇ～使い魔かぁ～。あなた名前は？』

『わしの名はネメシスじゃ』

『あたしは＊＊＊＊＊、リジーって呼んでね！』

――また、あの夢だ。

「最近やけにネメシスの夢見るよなぁ～……」

「どうしたのだリジー殿、眠れぬのか？」

「まぁ～ね。あんたも眠れないの？」

「拙者は侍でござる。侍は寝る時も油断はしないのでござるよ」

そうゆうもんなんかねぇ～……。

「それよりリジー殿、貴殿は何か悩みがあるのではござらんか？」

「目を閉じててもそうゆうことはわかるもんなの？」

「拙者が目を閉じているのは妖力が暴走しないようにするためでござるよ」

妖力の暴走ねぇ～……何か胡散臭いんだよねこいつ。

「拙者の目はフィア殿と似たような効果を持っているのでござるよ」

慧眼と酷似した能力か……。

「してリジー殿、何を悩んでいるのでござるか？」

本当にこうゆう能力を持ってる奴らは苦手だよ……。

「あんたも大してあたし達に自分のこと話して無いのによくそんなことが聞けるね～」

「これは痛いところを突いてくる。では、拙者も秘密を話すでござる」

まあ、それならいっか。

「拙者は人間ではないのでござる。さらに言えばこの世界の住人でもないのでござるよ」

「……そんなぶっ飛んだ話を信じろって？」

「別に信じる必要はないでござるよ。拙者は自分の秘密を言ったまで」

……この野郎。

「ささ、次はリジー殿の番でござるよ」

「……言えばいいんでしょ言えば！あたしは前に離れ離れになった使い魔のことが心配なの！悩み事は以上！これで満足？」

「いやリジー殿、まだ聞いてないことがあるでござるよ」

「何だよもぉ～……」

「リジー殿の使い魔のことでござる」

「はぁ～～～～……」

あたしは本当にこいつが苦手だ。

「何で使い魔のことなんか聞くの？」

「リジー殿の左手の甲にあるグリフォンの紋章、それは使い魔の契約の証しでござろう？」

「まったく、人の触れられたくないとこばっか触れてきやがって……」

「拙者も使い魔を見せるから五分五分ということに――」

「燃やすよ？」

「はっはっは、少し調子に乗っただけでござるよ？」

そう言いつつリュウは懐から札を出した。

「出でよ稲荷の神！」

札から雷が飛び散り一匹のキツネが姿を現した。

「麻呂に何か用かの？」

「拙者の使い魔の寿司麻呂（すしまろ）でござるよ」

「へぇ～結構かわいいじゃん」

「これは普段の姿で戦闘時はもっとでかくなるのでござるよ」

じゃあ、ヘブラスと一緒か。

「リジー殿の使い魔はグリフォンなのでござるか？」

「うん、昔帝都に住んでいた時に変な奴らに襲われてあたしを逃がした時からどうなったかはわからないんだ」

「しかし、手の甲にある紋章を見たことろまだその使い魔は生きているのではござらんか？」

「あっ、そっか！じゃ、じゃあネメシスはまだ生きてる！？」

「ということになるでござるな」

「よし！じゃあ、今から探しにいこう！」

「ちょ、ちょっと待つのでござる！オーガ殿やフィア殿はどうするでござるか？」

「なぁ～に壁にメモ残しとけば大丈夫っしょ？」

あたしは壁に『ちょっと出かけてくる、明日は丸一日帰ってこないかもねぇ～』と刻む。

「じゃ、行くよ」

「拙者も行くのでござるか？」

「当たり前っしょ？あんたが使い魔云々言い出したんだから」

「はぁ……では、空を飛んで行くのが手っ取り早いでござるよ」

ん、リュウも飛べるの？

「あんた、どうやって飛ぶわけぇ～？」

「拙者は空中も蹴って進めるのでござるよ」

「うっわ～何そのチート？」

「ズルはしてないでござるよ」

そして、あたしとリュウは適当なとこから外に出てネメシスを探しに行った

第六話　島国日和の侍剣士（後書き）

もう夏休みの終わりますねぇ……
新学期が始まるのでこれからは更新速度が落ちると思います。
次回も読んでいただけると嬉しいです！

第七話　すれ違う2人

帝都ブリギスの城には一部の人間しか知らない研究所がある。そしてそこに一人の男が向かっていた。

「奴の様子はどうだ？」

「はい、四十年間魔力を吸引され続けているにも関わらずまだ魔力が枯渇しません。さすが魔王と言ったところでしょうか」

「四十年か……」

男はそう呟くと言った。

「十年の上乗せはまだ有効のようだな……」

「はい？」

「いや、何でもない。それより、5心柱はどうした？」

「はい、部屋で待機していますが……」

「ドゥルジに出撃許可を出せ」

「了解しました」

そして、男はニヤりと笑って言った。

「貴様がどれほどのものか試してやろう、魔王子オーガ・ザントマ

ン」

＊

「へっくし！」

「大丈夫かオーガ？」

「ああ、誰か俺の噂してやがるな」

しかも、悪い噂だな。

「にしても――」

俺は一気に息を吸って叫んだ。

「――『ちょっと出かけてくる、明日は丸一日帰ってこないかもねぇ～』じゃねぇよ！ふざけんな――――――――！！！」

「本当に大丈夫か？」

「はぁ……はぁ……大丈夫だ。それより今日何をして時間を潰すかが問題だ」

「うむ、では鉱山ないを探検でもせぬか？」

「何でお前はこうゆう時はアクティブなんだよ……」

しかも目がそこらへんのエメラルドよりキラキラしてやがる。
「また、昨日のチンピラみたいなのが来たらどうするんだよ？」
急にとたとたと歩いていたフィアの足がピタッと止まった。どうやら若干トラウマになっているみてぇだな
「だ、大丈夫だ！私の慧眼を使えば誰がどこにいるなど簡単に――ひぃ！？こ、こんなにおる！？」
俺が読むにこの鉱山のあちこちにチンピラ集団がいたんだろう。
「じゃあ、チンピラがいねぇとこ行くか」
「う、うむ、それがいい」
てなわけで採掘所へ
「へぇ、本当に鉱石がいっぱいだな」
「さすが鉱山と言うだけはあるな」
採掘所はダイヤモンドやエメラルドにルビー、サファイヤが壁中から突き出てキラキラ光っていた。ちなみにフィアはさっきの１０倍ぐらい目がキラキラしている。
「……もしかしてお前が氷の魔法を使うのってキラキラしたものが好きだからか？」

「む、なぜわかったのだ？」

「いや、お前の様子を見てればわかるだろ……。そういや、ピッケルがねぇがどうやって採掘するんだ？」

「オーガ、何か棒の様なものを持っとらんか？」

「棒ねぇ……ああ、これがあった」

ジャキィィン！↑（棒が斧に変化した音）

「きゃぁぁぁぁ！？あ、危ないではないか！」

「ああ悪ぃ悪ぃ、俺が握ると変化するの忘れてた。じゃあ、適当にそこらにでも突き刺すか」

俺が地面に斧を突き刺すと斧は棒きれに戻っていった。

「では、ちょっと待っていてくれ――？Ｔｈｅ ｗａｔｅｒ ｈａｓ ｆｒｏｚｅｎ ｈａｒｄ． Ｉｃｅ ｂｅｃｏｍｅｓ ｔｈｅ ｓｈａｐｅ ｏｆ ｔｈｅ ｐｉｃｋａｘ！？」

そう唱えるとフィアは空中に魔法陣を書きだした。それと同時に俺の斧の周りの空気がだんだんと凍っていき、最終的にはピッケルの形になった。

「簡略魔法じゃねぇと不便だな」

「しかし、こっちの方が魔力消費は抑えられるのだ」

まあ、確かにな。

「ちなみに今の魔法は空気中の水分を凍らせるための詠唱と氷をピッケルの形にする詠唱による魔法なのだ」

おお、何かすげぇな。

「それは簡略魔法じゃできねぇのか？」

「普段だったら【ＦＲＥＥＺＥ】で凍らせておるな。まあ、簡略魔法を使うとこの５倍は魔力を消費してしまうがな」

そんなに魔力消費すんのかよ。

「でも、リジーは結構ポンポン簡略魔法使ってるよな？」

「あやつはバカだからな。まあ私も一気に魔力を消費しなければ大丈夫だからつい連発してしまうのだがな……」

てことはお前もバカじゃん。

「んじゃ、こいつで採掘するか」

そう言って出来上がったピッケルを持った瞬間――

ジャキィィン！↑（俺がピッケルを持った瞬間再び斧に変化する音）

「……そなたわざとやっておらぬか？」
「いや、そのつもりはないんだが」
こうなったらしょうがねぇか。
「このまま掘るか？ＢＵＲＳＴ！？」

ドゴォォォォン！！！

俺は魔魂召喚をして斧で壁を抉り取った。
「よし、取れたな」
「……そなたは魔力を節約する気はないのか？」
「別に今日は特に戦闘するわけでもねぇし大丈夫だろ」
「非常事態という例外があるであろう？」
こいつは心配性だな。
「たしかに長時間魔魂召喚するのは無理があるな、せいぜい１０分が限度だ。だが一瞬魔魂召喚する程度ならどうってことはねぇよ」

実際今、魔魂召喚していた時間は5秒もないしな。
「ほら、そのおかげでこんな綺麗なエメラルドが取れただろ？」
俺はエメラルドをフィアの方に放った。
「む？」
「やるよ。お前キラキラしたもの好きだろ」
「よいのか？」
「ああ」
「では貰ってやるとしよう」
口では偉そうなこと言ってるがポニーテールの先をいじってるとこを見ると喜んでいることが丸わかりだ。
「しかし、何で俺達は旅をしてるんだろうな……」
「急にどうしたのだ？」
「いや、勇者は世界が危機に陥った時に現れるだろ？俺は勇者になるとは言ったもののただぶらぶらほっつき歩いてるだけじゃねぇか。ぶっちゃけ人間側に悪ぃ奴がいるんならアルフヘイムにいるだろうしな」
「だが、私達は帝国から追われている身であろう？そう簡単に帝国

には入れんぞ」

そんなことはわかってるが、俺が今考えてるのは勇者になるために旅をする必要性があるかどうかだ。

「俺にはこの魔王の力がある。確かにまだうまく使えてねぇかもしれねぇが黒幕の人間ぐらいなら――」

「そなたには無理だ」

フィアが突然真顔になり俺の言葉を遮って言った。

「何だと？」

「そなたは勇者にはなれぬと言ったのだ」

「どうゆう意味だ？」

「そなたはなぜ自分の魔力が封印されておったか考えたことはあるのか？」

「ああ？考えたこともねぇな……。そういや前に一緒に帝都から逃げ出したおっさんが俺に魔魂水晶を渡す時に『お前は力に呑まれるかもしれない』とかなんとか言ってたな。まあ、魔王の力が強すぎて俺じゃ制御できねぇとでも思ったんだろ。ま、そんなことはなかったがな」

「そなたは本当にわかっておらぬようだな」

フィアが思わせぶりなことを言った。

「わかってねぇってどうゆうことだよ？」
「そなたは本当に自分が魔王の力をコントロールしていると思っておるのか？」
突然何を言い出すんだこいつは……。
「何でお前にそんなことがわかるんだよ？」
「私の慧眼でオーガを見た時魔力が何かに抑えられておった。恐らくは魔王の力が暴走しないよう誰かが細工しておったのだろう」
「一体何に？」
フィアは俺が握っている斧を指差した。
「魔剣斧【大剣鬼】それはオーガ、そなたの魔王の力を抑えるための武器だったのだ」
斧としての名はサタンクレセント、直訳すると魔王の三日月。つまり、俺の魔力を欠けた三日月みてぇに抑えてたってわけか。それはわかった、だが――
「フィア、急にどうしたんだ？お前らしくもない」
フィアは確かに鋭い目つきをしている。だが、こんなに冷たい目線で俺を見たことは一度もなかった。
「私がフロスト王国の姫であることを忘れたのか？」

「いや、そうゆうわけじゃねぇが……」

どうにも今のフィアは俺を親の仇を見る様な目で見ている。

「俺が何かしたのかよ？つーか、俺が魔王の力を制御できてねぇとか何とか言ってるがよーどうせフルパワーで魔王の力出しても大したこたぁねぇだろ？」

パァン！！！

その瞬間、フィアは一瞬悔しそうな顔をした後俺の頬をひっぱたいていた。

「何すんだよ！」

「……俺が何かしたのか？大したことはない、だと、そなたのせいでっ！？」

フィアは言いかけた言葉を飲み込み押し黙った。

「俺のせいで……何だよ？」

俺も語気が強くなっていた

「……それは言えぬ」

その一言が止めとなった。

「……んな」

俺は無意識のうちに口走っていた。

「言えねぇだと？ふざけんな！」

「っ！？」

俺が怒鳴った瞬間フィアはビクッと怯えた表情をしたが頭の線が切れている俺にはそんなこと気にしている余裕はない。

「俺はなぁお前のことを仲間だと思ってる、だから俺のせいだとか言われて揚句のはてにその内容が言えねぇっつんなら何かあると思うだろ！」

たとえ何があっても俺は冷静でいるつもりだった。だがこればっかりは無理だ。このことに目をつぶれば自分が信じてきたもの、その全てを否定されてる気がしたからだ。

「お前は仲間だ！だから俺のせいで何かがあったなら言え！」

俺は力の限り怒鳴り続けた。少し間が空き、フィアがぽつりと言った。

「……無理だ、言えぬ……」

「どうしてだよ！」

「それは……そなたには関係ない」

関係ねぇ……だと、ふざけんな！

「じゃあ何で泣いてんだよ！」

「黙れっ、私は泣いてなどいない！？ＦＲＯＺＥＮ！？」

フィアは涙を凍らせ弾丸のように俺に放ってきた。

「うおっ！？」

俺がひるんでるうちにフィアはどこかへ行ってしまった。

ドゴンッ！

「くそっ！何なんだ一体……」

俺はわけがわからず無意識のうちに鉱石の壁を殴りつけていた。

「おい……お前ら、俺が気づいてないとでも思ってんのか？」

「な、なんのことだい？」

俺が言うと岩陰からヘブラスとクララが出てきた。

「猫（偽）、苦しい言い逃れはやめましょう。では、わたくしは姫（笑）の所へ行きますので」

そう言うとそさくさとクララはフィアの後を追っていった。

「オーガ、大丈夫か……」

「悪ぃ、今は一人にしてくれ……」

「わかったよ」

ヘブラスは申し訳なさあそうに去って行った。

「ん、これは……」

ふと視線を足元にやるとさっきフィアにやったはずのエメラルドが落ちていた。

「あのバカ……」

後生大事に抱えていたくせにな。

「外で頭冷やしてくるか……」

居心地が悪くなった俺は斧を鞘にしまいその場を後にした。

＊

ノッカー鉱山から飛んでしばらく経った頃、１人の炎を纏った少女が空中で立ち往生していた。

「さてはあの方向音痴……道に迷ったなぁ～」

炎を纏った少女――リジー・サラマンダーは上空からリュウの姿を探していた。

「ん、あれは……沼？」

とりあえず、行ってみよぉ～。あたしは沼に向かって急降下した。

「ん～ここには何もないかぁ～……」

あきらめてそこら辺を散策しようとしたら声がした。

「そーこーにーいーるーのーはーだーれーだー」

「な、何！？」

ま、まさか、ゆ、ゆゆゆ幽霊！？

「なーんーだーきーさーまーはー」

「ああ、何だ水の妖精のセイレーンかぁ～脅かさないでよぉ～。あたしはリジー・サラマンダーだよ、よろし――」

「――サラマンダー！？殺す！？」

サバァァァン！！！

セイレーンはあたしの名前を聞いた途端に沼の水をやり状にしてあたしに襲いかかってきた。

「何でいきなり早口になってんのよぉ～！？」

さっきまでびっくりするぐらいトロイしゃべり方だったのにぃ～～～～！

「悪いけどちょ～っと痛い目見てもらうよ！？The flame burns everything. Water evaporates because of the heat of the flame.！？」

そして、仕上げに空中に魔法陣を書く。

ボゥ！

本当は簡略魔法で蹴りをつけたかったけど、さっきまでの長時間

飛行が尾を引いてあたしには魔力があまり残っていなかった。

「しっかしあっけないねぇ～。ま、あたしの魔力なら水の妖精でも楽勝だねぇ～」

「こーろーすー」

ザバァァァン！！！

「嘘、何でぇ！？」

あたしの炎をくらって何で無傷なの！？

「ほーのーおーけーすー」

もうセイレーンはほとんど正気じゃない感じで襲いかかって来た。

シュルルルル……パシッ！

「うわっ！？」

「つーかーまーえーたー」

あたしは突然のびてきた水のロープに巻きつかれた。

「何これ？取れないんだけど……しょうがないかぁ～？FIRE！？」

プシュゥゥ……

「何で蒸発しないの！？」

「コーロースー」

とうとう片言になりながらセイレーンは水の槍をあたしに飛ばしてきた。これって大ピンチじゃん！

「優針羅（うつはら）流抜刀術一式？電光石火！？」

ザンッ！！！

「ぶわぁぁぁぁ！！！」

あたしには一筋の雷が通ったようにしか見えなかった。そして、セイレーンは切られたところから黒い靄の様なものが噴き出して消えた。

「リジー殿大丈夫でござるか？」

「……何でここまで来れたわけぇ～？」

方向音痴のこいつがこんなにタイミング良くここに来れるわけがない。しかも目をつぶって。

「拙者目には特殊な力があると昨日言ったばかりではござらんか」

「あ～そう言えば……」

そんなことも言ってたようなぁ～言ってなかったようなぁ～……。

「強力な妖力が見えたのでここに向かったのござるが丁度リジー殿が危ない目にあっていたので助けたということでござるよ」

「妖力？あ～魔力のことねぇ～」

「左様、日和ではそう呼んでいるのでござるよ」

にしても――

「こいつど～すんの？」

あたしは足元に転がっているセイレーンを指差した。

「せっかくだからリジー殿の使い魔について聞いた方がいいのではございらんか？」

「そだね、おーい起きろぉ～」

「んん……ん？私は一体……」

どうやらコボルト達と同じであの黒い靄に操られて記憶が混同しているみたいだね。

「ちょ～っと聞きたいことがあるんだけどぉ～？」

あたしはセイレーンにネメシスについて聞いた。

「グリフォンですか……」

「どんなことでもいいから何か知ってたら教えて！」

「まあまあリジー殿、落ち着いてくだされ」

リュウはあたしをなだめつつ言った。

「貴殿は何か知っておられるな？」

「ええ……私は以前帝国に追われていた時があったのですがその時に魔魂召喚専門の魔導師がグリフォンを魔魂召喚しているのを見たことがあるのです」

「帝国の……魔導師……」

「リジー殿？」

「セイレーン、情報あんがとね。あたしたちはもう行くよ……？FIRE！？」

ボウッ――シュゥゥ……

あたしは飛んで帰ろうとして発火しようとしたけど魔力切れだった。

「リジー殿、無茶でござるよ。魔力切れで飛ぼうとするなど……」

あたしはそのまま気を失った。

＊

フィアと口論になった後、俺は適当な場所から外に出ていた。っても鉱山の内部から出ただけで鉱山から出たわけじゃねぇけどな。

「はぁ……」

自然と溜め息がこぼれる。

『そなたのせいでっ！？』

『そなたには……関係ない』

『黙れっ、私は泣いてなどいない！』

さっきからフィアに言われたことが頭から離れない。俺のせいで何があったはわからねぇ。わかってることは俺のせいでフィアが泣いたってことだけだ。

「……そんなところで何をしている？」

「っ！？」

振り返ると俺の前には青い髪に光彩の消え失せた目をした少年がいた。

「誰だてめぇ！いつからそこにいた！」

さっぱり気配を感じなかった。こいつタダものじゃねぇな……。

「……さっきからいたが君があまりにも呆けているから声をかけたんだが？」

「……」

どうやら俺が気づかなかっただけらしい。だが、こいつが全身から放っている殺気はどう考えても友好的なものではない。

「お前、帝国軍か？」

「……あんな連中と一緒にするな、僕は純粋に戦闘を好むタイプだ。周りのことには干渉されない」

「ほぉ……敵じゃなきゃ気が合いそうだな」

「……ああ、残念ながら僕は敵だ」

「俺を殺しに来たのか？」

「……いや、魔王の力をコントロールできてない君をここで殺してもつまらない。僕はアドバイスしに来たんだよ」

少年はそう言うとより一層強い殺気を放った。

「てめぇ一体何もんだ！」

俺が叫ぶと少年は無表情のまま言った。

「……ヴェンダ、それが僕の名だ」

ヴェンダはそのまま背中の剣を抜いた。途端にその剣は輝かしい大剣に変化した。

「……殺し合い、とまでは行かないが僕と手合わせして欲しい」

俺も背中から斧を抜く。棒きれは巨大な斧になり禍々しいオーラを放っている。

「はじめから本気で行くぜ？」

「……構わないよ」

澄ました態度とりやがって！

「？ＢＵＲＳＴ！？」

「？ＨＯＬＤ！？」

「何っ！？」

こいつも魔魂水晶なしで魔魂召喚を使えるのか！？

「……まず魔魂召喚が自分の専売特許と思わないほうがいい」

「このっ！？」

ガキィィィィン！！！

俺の斧とヴェンダの大剣が激しくぶつかり合う。

「くそっ！これでもくらいやがれ！」

ドンッ！

俺は右足でヴェンダを蹴り飛ばす。体勢を崩したヴェンダは隙だらけだった。

「もらったぁぁぁぁ！」

ガシッ！

「何だと！？」

俺がフルパワーで振った斧をヴェンダはいとも簡単に、片手で受け止めた。

「……やはりこの程度か」

無表情で――それでいてどこか残念そうにヴェンダは呟いた。

「……君はどんなにあがこうと魔王子だ。そして何より自分の力を過信し力に呑まれるような奴は勇者にはなれない」

ヴェンダの言葉は俺の心を的確に抉ってきた。そしてヴェンダは空いているもう片方の手で俺を殴り飛ばした。

「……僕は今の君には大して興味が湧かないな」

そう言い残し、ヴェンダはいつの間にか消えていた。

「……どうやらフィアの言ってた通り俺は何もわかってなかったみてぇだな」

それとおっさん、どうやら俺はあんたの教えを微塵も理解出来てなかったみてぇだ。

第七話　すれ違う2人（後書き）

新学期が始まり勉強と執筆の両立は大変です！
今回も呼んで下さりありがとうございました！

第八話　動きだす5心柱

――帝都の城にあるＢＩＰルーム

部屋には２人の人間がいる。

「おいドゥルジ、貴様に出撃命令が出ているぞ」

「マジかー面倒だな」

ドゥルジと呼ばれた青年はさも嫌そうに答えた。

「シヴァ、お前が代りに行ってくれねぇか？」

「断る。これはこの世界の英雄直々の命令だ」

野太い声でシヴァはドゥルジの頼みを一蹴した。

「チッ、つれない奴」

そんなやり取りをしているとドアが開き一人の少年が入って来た。

「おーヴェンダじゃないか。どうだった？」

ヴェンダは無表情で――なおかつ話自体に興味がない口調で答えた。

「……何がです？」

「ごまかさなくてもお前があの魔王子と会って来たことぐらい知ってんだぞ」

得意げに言うドゥルジに対してヴェンダはやはり無表情で言った。

「……僕の興味が無くなる程度の奴ですよ」

そして、ヴェンダはそそくさと消えてしまった。

「ヴェンダもつれないよなー。とっとと仕事片づけるか……」

ドゥルジはそう呟くとＢＩＰルームを後にした。

＊

「ヴェンダ」

自分の名前を呼ばれ、振りかえるとそこには僕の父でありこの世界の英雄ジャック・リーパーがいた。

「……父さん、何か用ですか？」

「いや、今日でもう魔王の魔力抽出も４０年目だ。またお前の魔力強化を行おうと思ってな」

魔王が捕まったのはほんの１０年前のことだ。４０年分の魔力を

抽出しているのは確かだが、城の人間は強力すぎる魔法の副作用で４０年経っていると錯覚している。しかも――

「……僕の前では体裁上の数値は言わなくても構いません。……それと魔力強化などしなくても僕は自分の力には満足しています」

父さんはなぜか魔法の副作用による時間間隔の錯覚を十年の上乗せと言っている。まあ、なぜそう呼んでいるかなどと野暮なことは聞かない。

「そうか、まあそれなら人体実験ように適当な奴に回すか……」

そう呟くと父さんは実験室の方へ向かった。

「ヴェンダ様」

急に実験室とは反対側から魔導兵がやって来た。

「……何だ？」

「魔王子オーガ・ザントマンとその仲間達の顔写真です」

そう言って魔道兵は４枚の写真を見せてきた。

１枚目にはこの前会ったばかりのオーガ・ザントマンの写真。

２枚目には金髪の混じった赤い髪の魔導兵の裏切り者、リジー・サラマンダーの写真。

３枚目には緑色の長髪を後ろで結い目をつぶっている少年、虚原龍

之介の写真。

４枚目には――

「……ん？」

何かが引っかかる。それだけが４枚目の写真に写っていた少女フィア・フロストの顔を見た印象だった。

「……まあ、大したことじゃないだろう」

そう自分に言い聞かせ僕はその場を後にした……まるで自分の存在自体が消えて行くように。

＊

「で、なぜそなたらはそのようにボロボロなのだ？」

俺がヴェンダと一線交えて鉱山内に戻ってきた時、ちょうど気絶したリジーを抱えたリュウと合流した。そしてそのままフィアの前に行くと思いっきり呆れられた。

「まあ、いろいろあってな……」

「拙者も同じでござる」

「……う～ん……」

リジーは相当疲れているのかぐったりしていた。
「今日もここで足止めか……」
「そんなに急ぐ旅ではないであろう？」
そう言うフィアの様子はいつも通りだった。
「まあ、そうだな」
「では、近くの村まで歩くのが一番いいと思いますぞ」
俺とフィアはリュウの意見に2つ返事で賛成し、ノッカー鉱山から一番近い村であるファハン村へ向かった。
「しかし、驚いたな……」
「うむ、まさか鉱山を出たとたんに村があるとは……」
ファハン村は炭鉱の村で村の鉱山に近い場所では所々直接ベルトコンベアーを鉱山に取りつけ、採掘した鉱石を工場に運び込み加工していた。
「とりあえず宿を取らねぇとな……」
俺達は村の宿屋で部屋を取りそれぞれ自由行動ということになった。
「鍛冶屋にでも行くか……」

俺はとりあえず村で一番大きな建物の鍛冶屋に向かった。

カンッ　カンッ　カンッ　カンッ　カンッ

中では一人の若いドワーフが一心不乱に刀を打っていた。そういや帝都の鍛冶屋のオヤジもドワーフだったな。

「おーい、ちょっといいか？」

「……ん、客か？いらっしゃい」

若いドワーフは仕事に一段落ついたのかこっちを振り返った。

「武器を見て欲しいんだがいいか？」

「ああ、いいぞ」

俺は背中の斧を抜いてドワーフに渡した。

「こいつは……魔剣か？」

「正確に言えば魔剣斧だがな。帝都でドワーフのオヤジが日和の妖刀を斧に改造したものらしいがな」

俺が妖刀が斧になった経緯を話すとドワーフは驚いた顔をして言った。

「帝都のドワーフ！？まさか、これはワドルフ師匠が鍛えた斧【魔剣斧『大剣鬼』】！？」

「知ってんのか？」

俺が聞くとドワーフは一気にしゃべりだした。

「俺の名前はアイロン。あの勇者の剣エクスカリバーを鍛えた名工ワドルフの１番弟子だ！まあ、俺以外に弟子はいないんだが……それはどうでもいい！師匠の改造した斧【魔力を喰らう魔剣斧『大剣鬼』】を持っているってことはあんたが魔王子オーガ・ザントマンか？」

ドワーフのくせによくしゃべるな……。だが、そんなことより気になることがあった。

「俺が鍛冶屋に行った時はお前はいなかったよな。どうして俺のことや斧のことを知ってるんだ？」

いくら何でも話を聞いただけにしては詳しすぎるだろ。

「俺は、かなり前に認定試験に合格したからな。師匠が斧に改造する時だけ帝都に行ったんだ」

「なるほどな」

だが、まだ気になってることがある。

「魔力を喰らう？」

俺はフィアから聞いた限りでは抑えるって思ってたんだが……。
「この魔剣斧は影が満月を喰らい三日月にするように主の魔力を喰らい変化する類の力を持っているんだ」
「つまり、俺の魔力――魔王の力を食ってこの斧は変化してんのか？」
「そうなるな」
だから俺の魔力が暴走しなかったわけだ。となると――
「俺はこの斧を少しでも手放したらまずいんじゃねぇか？」
斧が俺の魔力を食うことで魔王の力の暴走を抑えてんだったら、俺が斧を手放すことはブレーキがない暴走車両に乗ってんのと同じだ。
「まあ、魔力を食われ続けているんだから一定時間は手放したとしても大丈夫だろう」
確かにいきなり魔力が増えるとは考えにくいな……。
「いろいろと参考になった、ありがとな」
とりあえず俺はいろいろ教えてくれたアイロンに礼を言った。
「大したことはしていない」

アイロンもそのまま作業に戻ろうとした。そういや、鍛冶屋にはもう1つ用事があったな。

「なあお前、アクセサリーの加工とか出来るか？」

「俺はドワーフだぞ？」

アイロンは不敵に笑った。

＊

オーガは悪くない。

そんなことはわかっておる。

だが、どうしても割り切れないことがある。

「なぜ私はあの時……」

本来ならば魔王子は憎むべき相手だったのだ。

自分の大切な人を奪った元凶。

なのに――

「なぜ私はオーガに『私を外の世界へ連れて行ってくれ』と言ったのだろうか……」

初めて会った時からオーガが悪い奴でないことはわかっておった。慧眼とは関係なく自分の人を見る目として――無論慧眼で見ても邪悪な要素は何１つ無かった。だから――

「私はオーガや皆と旅を続けておるのかもな……」

自分の気持ちに踏ん切りがついたところでとある違和感を思い出す。

――リュウ

あやつは嘘をついている。悪い奴ではないが、どこか信用ができない男だ。私の感想としてはそんなところだった。

「そういえばドデカミンが言っておったな……」

ノッカー鉱山で気を失って村まで連れてこられたドデカミンはリュウについて私に話してくれた。

『リュウってチビと同じような目の能力持ってんだってぇ～』

確かに目をつぶっていても慧眼なら周りを広範囲で見渡せたりはする。だがリュウが私の慧眼と同じような能力を持つなどあり得ない。なぜなら――

「む、どうされたのでござるか、フィア殿？」

――リュウには両目とも眼球が存在していないからだ。

＊

アイロンに注文をして鍛冶屋を出た後俺は意外な奴から話しかけられた。

「おーオーガの旦那じゃねぇか！」

こいつはインディ村で黒い靄の影響で暴走していたところを俺が助けたサイクロプスのクロップだ。確か正気に戻ってからは配達屋をやってるって聞いたな。

「配達か？」

「ああ、リジー姐さんの耐熱服が出来たんで持って来たんだ」

そういやリジーはインディ村の服屋で耐熱服を注文してたな。

「リジーなら宿で寝てるぞ」

ノッカー鉱山でリジーとリュウが野暮用済ませて帰って来た時、ボロボロのリジーをリュウが抱えてきた。本当に何やってんだか……。

「そんじゃあ、俺様は姐さんの部屋に荷物を置いてとっとと帰るとするか」

クロップがそう言って宿の方に向かうのを俺は引きとめた。

「なぁちょっといいか？」

「どうした？」

「いや、俺も頼みたいものがあってな……」

――てなわけで次の日

「さぁて、十分に睡眠も取ったし、リジーは完全回復したし、クロップからＧＰＳ魔法陣は貰ったし、この村にはもう用はねぇな！」

やることやったら前へ進む！やっぱ旅はこうでなくちゃな！

「……なぜか物凄く説明臭く感じるのだが」

気のせいだろ。

「んで、次の街は？」

「こっから一番近い街はねぇ～……あっ、港町のヴォジャノーイじゃん！」

てことはリュウの目的地か。

「じゃあ、リュウとはそこでお別れか」

「はっはっは、そう気を落とさないでくだされ。人との出会いは一期一会でござるよ」

そう気楽にリュウは笑った。

「……あたしゃ別にこいつがいつ消えても構わないけどねぇ～」

へらへらと言うリジーだったが目が笑っていなかった。

「「……お前（そなた）ら何があった（のだ）？」」

俺とフィアは声をそろえて聞いた。

「知りたい～？そんなに知りたい～？」

「「いや、全然」」

俺とフィアは表情がさらに強張るリジーを見て身の危険を本能で察知した。

「では、出発でござる」

俺達はそんないつものやり取りをしながら村を出発した。これからもしばらくこんな感じで旅が続くと誰もが思っていた。だが、それは村を出て数分で打ち砕かれた。

「いんや～待ちくたびれたぜ、魔王子と不愉快な仲間達御一行さん」

「誰だ！」

「誰って……あんた自分の立場わかってんのかねぇ～？お前を狙ってんのは帝国ぐらいだろ？」

俺達は村を出て数分歩いたところで一人の男に出くわしていた。

「俺は帝国5心柱のドゥルジだ。よろしくな～」
「ったく、リジーみてぇなしゃべり方しやがって……」
「オーガ、燃やしていい？」
「まあまあ、リジー殿」
後ろでリジーとリュウが何か言っていたが俺はそれどころじゃなった。
「5心柱だか何だか知らねぇがぶっ飛ば――」
「待つのだ！」
俺がさっそく魔魂召喚しようとしたらフィアに止められた。
「何だよ？」
「そなたの戦い方、魔力などは帝国の敵には知れ渡っていると思うのだ。ここで下手に戦うのは危険だ」
まあ、確かにフィアの言う通りかもしれねぇな。俺はいまだに魔王の力に頼る傾向にあるし、帝国の近衛兵に所属していた頃の俺の戦い方はもう把握されているだろう。
「わかった、ここは下がろう」
「む？やけに物解りがよいな」

フィアが不思議そうに言った。まあ、俺は戦闘狂だしな……そう言われるのも無理もねぇか。

「いや、ただ自分の力を過信し力に呑まれる奴は勇者にはなれないと思ってな」

まあ、ヴェンダの受け売りなんだけどな。

「……オーガ」

……何かフィアが俺をこの前親の仇を見る様な目をしていたとは思えないほどの感動の眼差しで俺を見ていた。エメラルドグリーンの瞳にはうっすら涙すら浮かんでる。俺そこまでいいこと言ったか？とりあえずヴェンダに感謝だな。

「つーか、ヴェンダがさっさと片付けてくれりゃ俺が楽出来たのによ」

「は？ヴェンダ？」

「お前この前会ったんじゃなかったのか？」

「確かにコテンパンにされたが――」

「ああ、あいつ5心柱のリーダーだから」

前言撤回。あの野郎本当に敵だったのかよ！

「しっかし、やってらんねぇ～とりあえずお前ら全員死刑な？」

へらへらしながら物騒なことを言う奴だ。
「まあ、ここは拙者に任せて下され」
リュウが前に出て刀の柄に手をかけた。
「ほう〜お前なら楽しめそうだな」
ニヤリと笑うとドゥルジは懐から魔魂水晶を取りだした。
「肩すかしはやめてくれよ？召喚【地獄の番犬ケロベロス】！」
魔魂召喚は武器に力を付加させるかその場に召喚し戦わせるのが一般的だ。ドゥルジは魔魂水晶からケロベロスを召喚した。
「先手必勝でござる。優針羅（うつはら）流抜刀術一式？電光石火！？」

ザァン！！！

リュウは俺でも見えねぇほどの速さででケロベロスを真っ二つにした。
「たった一太刀でケロベロスを真っ二つかぁ〜、さすがだな虚原龍之介」

「拙者の名を知っているとは驚きでござる」

少しも驚いた感じも無くリュウは攻撃態勢に入った。だが――

「召喚！召喚！召喚！」

――ドゥルジは驚くべき速さでケロベロス、キメラ、そしてグリフォンを召喚した。

「ネメシス！？」

グリフォンの姿を見たとたんリジーが驚いたような声を出した。

「ああ、そう言えばこいつはレプリカだが、オリジナルは帝国の牢屋だったな」

「てめぇぇぇぇ！」

リジーはいきなりドゥルジに殴りかかろうとしたが――

「待ってくだされリジー殿！」

――リュウがそれを止めた。

「止めるなリュウ！あたしはっ！」

「理性を失っては勝てる相手も勝てない。それは貴殿が一番よくわかっているのでは？」

「……わかった、ここはあんたに譲る」

そう言ってリジーは引き下がった。

「話は終わったか？お前らやれ！」

ケロベロスが飛びかかり、キメラがビームを放ち、グリフォンが硬化した羽を一気にリュウへ放った。

「迅雷歩？蛇腹蹴り（じゃばらげり）！？」

リュウは3匹の魔獣の攻撃をかわしその直後、雷が走るように強烈な蹴りを3匹に入れていた。

「グルァ！？」

「ギャオ！？」

「ガルォ！？」

3匹はあっとゆう間に消えて行った。

「そうか、やっぱ聞いた通りの強さだな……んじゃ、召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！召喚！」

ドゥルジは大量の魔獣を召喚した。嘘……だろ……？

「普通1度にこんな大量の魔獣を召喚できるわけねぇだろ……」

絶句する俺にフィアが説明してくれた。

「恐らくあの魔魂水晶には魔力が込められていないのだ。魔獣を捕まえてその魔力形式さえわかればそれだけで魔魂召喚はできる。あのドゥルジという男は自分の魔力を水晶に込め、魔力形式をその魔獣に合わせておるのだ。自分の魔力を使えば召喚速度や一度に召喚できる魔獣に制限はないからな」

……詳しいことはよくわからねぇがあいつの魔力が底知らずということだけはわかった。

「しかたがあるまい……優針羅流抜刀術四式？斗折蛇行！？」

ザンッ！　ズバッ！　ザシュッ！　スパンッ！

リュウは物凄い速さで魔獣達を切り捨てていった。

「ははっ、剣を抜いたな？」

「何っ！？」

リュウの刀は何ともなかったが腰に差している龍が巻き付いたような鞘には蜘蛛の糸の様なものが巻きついていた。

「ははっ、俺がアラクネを魔魂召喚してるとは気がつかなかったみてぇだな」

アラクネ。上半身が人間で下半身が蜘蛛の姿をしている魔獣（と言うより魔人か？）だ。切り捨てられた魔獣の群れを見ると確かにそれらしき奴は転がっていた。

「お前の刀は島国日和の名工吉光が打った妖刀らしいがそれは真っ赤な嘘で、本当は魔力を持つのは鞘の方なんだろ？」

「どこでそれを！？」

珍しくリュウが動揺していた。

「聞いたんだよ、５心柱の仲間にな。龍刀【蛇尾】、それがその太刀の名前だろ？抜刀時が一番威力が高く時間が経つにつれてだんだん切れ味が落ちて最終的には何も切れない鈍になる」

「そこまで知っているとは計算外でござる……」

てことはリュウの刀自体は強くねぇが鞘に入れて抜いたら鞘の魔力を吸収して強くなるってことか、まるでインクと羽ペンみてぇだな。

「お前のもう一つの弱点はこれだ！」

ドゥルジは懐から緑色の魔魂水晶を取りだした。

「召喚【発狂する植物マンドレイク】」

キエエエエエエエエエエエエエエ！！！

「ぐわっ！」

「むぅっ！」

「うわっ！」

俺達は反射的に耳を塞いだがそれでもマンドレイクの叫び声は強烈だった。そしてリュウは――

「がぁぁぁぁぁぁ！！！」

凄まじい叫び声を上げるとそのままその場に倒れてしまった。

「リュウ！」

「目が見えない奴ほど耳がいいってのは基本だろ？」

「リュウはフィアと同じ慧眼持ちじゃねぇのかよ？」

俺が疑問に思ってると隣でフィアがぼそっと呟いた。

「……やはりな」

「やはりってどうゆうことだよ？」

俺の質問に答えたのはフィアではなくドゥルジだった。

「本当にマナフから聞いた通りだな……こいつは両目を幼いころに失っているらしいな。まあ、仲間に嘘をついたりするからこんなことになるんだな、ざまぁねぇな」

ゴウッ！

急に俺とフィアとの間を炎の玉がすり抜けて行った。危ねぇな……。

「リジー？」

後ろを振り返るとメラメラと燃えあがる（比喩ではない）リジーが立っていた。

「ほう、お前が魔導兵団の元副隊長のリジー・サラマンダーか。ははっ、こいつも楽しめそうだな」

「がぁ……×◆＃＊！」

リジーは言葉にならない叫び声をあげてドゥルジに突進していった。

「まずいぞ、あやつ意識が飛んでおる！」

「こいつは本当に面白いことになって来たな！詠唱なしで出る炎、サラマンダー……まさか！」

「◎▼×◆＃＊◎▼×◆＃＊！」

ボウッ！　パシッ！

リジーは雄たけびを上げて炎を纏いながらドゥルジに殴りかかったがそれは簡単に受け止められた。

「サラマンダーの魔魂水晶を体内に持つものがいるとは思わなかったな。こりゃ～ついてるぜ！」

体内に魔魂水晶？

「どうゆうことだ？」

首をかしげる俺にまたもやフィアが説明してくれた。

「魔魂水晶は魔族の力を込めた物と言われておるが、元々は妖精の魔力を込めた物が魔魂水晶のもとなのだ。そして、恐らくドデカミンの体内にあるというサラマンダーの魔魂水晶とはこの世界に存在する四大妖精の魔力が込められた魔魂水晶の１つ――」

――サラマンダーの魔魂水晶か。

「なるほどな、まさかあいつの体内にそんな凄いものがあったとはな……」

だからあんなに強かったのか。

「ははっ、だがその勢いもこれで終わりだ！召喚【半魚の美女セイレーン】」

ドゥルジは水色の魔魂水晶を取りだしセイレーンを自分の体に召喚した。

「自分の体に召喚だと！？これではまるで――」

――まるで俺と同じ、つまり魔王と同じだな。

「ははっ、俺は特別なんだよ！？ＷＡＴＥＲ！？」

ザバァァァン！！！

「うわっ！――げほっげほっ！」

「目は覚めたか？」

「くっそぉ～やられちゃったかぁ～……」

正気に戻って悔しそうに言うリジーだったがその顔をまだ何か奥の手があるような顔だった。

「今度はこっちの番だ！？ＡＱＵＡ！？」

ドゥルジは簡略魔法で水を纏い殴りかかって来たがリジーはそれをギリギリのところでかわす。

「まずいな……これじゃジリ貧だ」

水を纏って攻撃されちゃリジーは炎を使えない。どう考えても勝ち目はない。

「オーガ、ドデカミンの足元を見るのだ」

フィアはまったく心配してない様子で言った。

「足元？」

リジーの足元を見るとリジーはうまく攻撃をかわしつつ足に纏った炎で魔法陣を書いていた。

「何の魔法だ？」

「恐らくあれは――」

「――いくよぉ～！？Ｔｈｅ ｃｏｌｌｅｃｔｅｄ ｅｎｅｒｇｙ ｉｓ ｒｅｌｅａｓｅｄ ａｔ ａ ｓｔｒｅｔｃｈ． Ｓｏ ａ ｖｏｌｃａｎｏ ｅｘｐｌｏｄｅｓ．！？」

「何っ！？？噴火魔法（ヴォルケーノ）？だと！？」

噴火魔法、それは炎系の魔法の中でも最高の威力を誇る魔法だ。普通なら優秀な魔導師が１０人集まっても発動できないほどの帝国兵器並みの魔法で１人で発動できるような魔法ではない。だが、体

内にサラマンダーの魔魂水晶を持つリジーなら――

ズゴォォォオン！！！

「……ざまぁみろ」

――簡略魔法は無理でも詠唱と魔法陣込なら発動できるってわけだ。

「ふぅ、さすがに疲れ――」

「？ＰＡＲＣＨ！？」

ズバッシャァァァァン！！！

「がはっ！」

急に爆発地点から熱風の槍が飛んできてリジーを貫いた。

「リジー！」

「今のはさすがの俺もビビったぜ……ヴリトラを召喚してなかったらおっ死んでたぜ」

「あの一瞬で召喚獣を切り替えたのか！？」

何て奴だ。帝国５心柱にはこんな奴があと４人もいるのかよ……。

「こうなったら……俺がやるしかねぇみたいだな」

リュウとリジーがやられた相手だ、俺が敵うはずがねぇ。それでも俺は――

「仲間をやられて黙ってるほど俺は温厚な性格はしてねぇんだよ！」

というわけで――

「――クララ！リュウとリジーとフィアを連れて逃げろ！」

「かしこまりました、王子（仮）！」

クララは物凄いスピードでフィア魔魂水晶から出てきてタコ足を伸ばしリュウとリジーをからめ取ってフィアを抱えて猛ダッシュした。以外と足早ぇな……。

「クララ！オーガはどうするのだ！？」

「今は王子（仮）を信じましょう」

そう言い残してクララ達は見えなくなった。

「さぁてこれで心おきなく戦えんな」

「俺が仲間を逃がすのを待っていたのか？」

随分と余裕たっぷりじゃねぇか。

「ヘブラス、戦闘だ――って寝てんじゃねぇよ！？」

どうもヘブラスの声がしねぇと思ってたら寝てやがったなこいつ。

「ふうぁぁ……ん？」

「ヘブラス、戦闘だ！」

「オッケイ！？ＢＵＲＳＴ！？」

俺が改めて言うと眠気が吹っ飛んだのかヘブラスは臨戦態勢に入った。

「とうとう魔王子のお出ましか、今日は面白すぎる１日だぜ！」

「そんなお前の１日俺が台無しにしてやるよ！？ＢＵＲＳＴ！？」

俺も魔魂召喚をして、臨戦態勢に入った。

第八話　動きだす5心柱（後書き）

どうもＬｅｎｂｉｒｄです！
今回もこの小説を読んでくださりありがとうございました！
今回はいつも以上に読み返したのでミスはないと思います……。
ＰＳ：今までで一番ミスだらけでした；；すみません……。

人物紹介　その４

虚原龍之介……島国日和出身の侍剣士。魔法は日和で身に付けた剣術に雷を付随し強化するもの。使い魔は稲荷の神の寿司麻呂であり、懐に忍ばせた札から召喚する。いつも飄々とした態度でリジーやフィアからはあまり信用されていない。特にリジーからは物凄い勢いで嫌われている。

特徴：普段は目を瞑っている。緑色の長髪を後ろで括っている。腰に龍が巻き付いたような刀を差している。身長が高い。

好きなもの：玄米

嫌いなもの：自分の過去について聞かれること

第九話　召喚魔導師ドゥルジ

ガキンッ！！！

俺とドゥルジが戦ってからもう１０分が経つ。そろそろ俺の魔魂召喚できる時間に限界がきそうだ。

「くそっ！何でこんなに皮膚が硬ぇんだよ！」

「ははっ、【動く石像ガーゴイル】の硬度はてめぇの斧ごときじゃ敗れねぇよ！」

こいつの瞬時に魔魂召喚を切り替える技は厄介だな……。

「グルァァァァ！」

ヘブラスがドゥルジの後ろから飛びかかる、だが――

「おっと、召喚【鳥蛇バシリスク】」

「ヘブラス！目を見るな！」

キィィィィン……

「ガ――」

――ヘブラスは石にされてしまった。

「まったく、獣っていうのは単純だねぇ～」

「てめぇぇぇぇ！」

「召喚【動く石像ガーゴイル】」

俺が斧で切りかかってもすぐガーゴイルで受け止められる、ヘブラスは石にされた。正直手詰まりだった。

「ははっ、ざまぁねぇな！今度はこっちから行くぜ！？ＲＯＣＫ！？」

ドゥルジが唱えると俺の頭上から大量の岩が落ちてきた。

「こんなもん全部薙ぎ払って――」

――俺が斧を構えた時、ちょうど魔魂召喚時間が切れた。

「くそっ！こんな時に！」

俺って運から見放されてんじゃねぇのか？

「こうなったら避けるまでだ！」

もちろん全部避けきれるわけもなく、俺の肩や腕に何個か岩の破片が突き刺さった。

「ぐっ！」

「ははっ、もうそろそろお前らも終わりだな……肩すかしにも程があるだろ。さっきの2人の方がよっぽど骨があったぜ？特にリジー・サラマンダーはな」

確かにリジーは理性を飛ばして詠唱なしで炎をぶっ放せるのは中々真似できることじゃねぇが――

「お生憎様、俺は理性を飛ばす気はねぇんだよ！」

もはや食う魔力もないのか斧はただの棒きれに戻っていた。

「だったらここで死ね！？ＳＴＯＮＥ！？」

ドゥルジの石化した状態の蹴りが飛んでくる。蹴りが俺の頭に当たる直前――

「？ＢＡＲＫ！？」

「何だと！？」

――ドゥルジの魔魂召喚が解けていた。

「こうなったら……！」

俺は棒きれを投げ捨てて唱えた。

「？ＢＵＲＳＴ！？」

斧が俺の魔力を食うなら斧を離せば魔力は回復する――確かにすぐ全回はしねぇが暴走しねぇ程度には回復するはずだ。

つまり――

「てめぇをぶっ飛ばすには十分なんだよぉぉぉぉ！」

バキバキバキッ！

「がはっ！」

俺はドゥルジを力の限り殴り飛ばした。

「やったね、オーガ」

向こうから魔魂召喚を解いたヘブラスがやって来た。

「やっぱさっきの咆哮はお前だったのか」

しっかし――

「お前あんな魔法使えたのかよ」

「ベヒーモスの咆哮は例外なく魔法を解除するんだよ。知らなかったの？」

知らねぇよ。つーかそんなドヤ顔しても伝わらねぇよ。

「まあ、とりあえずあいつらを追いかけるか」

「そうだね、それとおいらたち魔導傷だらけだしね。早く治療しないと」

俺はもう経験済みだが帝国軍の奴らは魔法に特殊な加工をしてる。そのせいで奴らの魔法を喰らうと魔導傷という後遺症が残る、この後遺症は治癒魔法で解除しない限り怪我が自然治癒しないという厄介なものだ。俺やヘブラスみたいに魔族なら怪我なんて放っておけば治るんだがどうにも魔導傷は厄介だ。

「じゃあ、早く行く――」

「俺がてめぇらごときに負けるわけがねぇんだよぉぉぉぉぉ！！！？ＳＴＯＮＥ！？」

「オーガ！」

全身ボロボロの状態でドゥルジは岩槍を飛ばしてきた。

「ぐわっ！」

俺をかばってヘブラスは倒れた。

「ヘブラス！」

「ははははははっざまぁ！」

ドゥルジはそのまま俺に襲いかかって来た。俺は――

「鬼が出るか蛇が出るか……今日三回目の魔魂召喚いってみるか――？ＢＵＲＳＴ！？」

その瞬間俺の中で何かが弾けた。

「な、何だ！？この異常な魔力は！？」

俺が魔魂召喚した瞬間、俺を中心に物凄い衝撃波が出ていた。

「がっ！あがぁぁぁぁ！？」

爆発的な魔力の渦の中心にいる俺の痛みは尋常じゃない。そして――

「ぐっ、……やっぱ三回目の魔魂召喚はキツイな……」

体が鉛みてぇに重い。

「は、ははっ、所詮体が動かないんじゃ意味がねぇよな！」

そう言うドゥルジの声は震えていた。どうやら恐怖で正気に戻ったようだ。

「時間がねぇ！ヘブラス！」

「わかってるよ！」

ヘブラスは何とか起き上がり俺の方に棒きれを投げてきた。

「いくぜぇぇぇぇ！」

「がはっ！」

それを受け取り俺はドゥルジの顔面を殴り飛ばし、続けて腹を蹴り飛ばした。

「まだまだぁぁぁぁ！」

「ぐあっ！」

俺は斧を振りかぶり斧に溜まった魔力を一気に解放した。

「これで止めだぁぁぁぁ！」

ザァァァァン！！！

「ぐっ、あがぁぁぁぁ！」

ドゥルジは魔力の波に押しつぶされながら吹っ飛んだ。

「……こんどこそ……終わった……な」

くそっ、目がかすむ……。

「……この俺が……てめぇら……ごときにっ！」

まだ生きてやがったのか……。

「負け……られねぇ！俺は……帝国５心柱だぁぁぁぁ！？ＳＴＯＮＥ！？」

こいつも死に物狂いで俺を殺そうとしてるみてぇだな。

「？ＢＡＲＫ！？」

「くそっ！またか！」

いつの間にか魔魂召喚したヘブラスがドゥルジに咆哮をぶち当て、俺を背中に乗せて走りだしていた。

「お前その体で無茶しやがって……」

「オーガに言われたくないよ」

「それも……そう……だな」

そのまま俺は気を失った。

＊

「むぅ……」

「どうされました姫（笑）？」

さっき、オーガが戦っている方で物凄い魔力を感じたのだが……。

「いや、何でもない」

「どうせ王子（仮）のことが心配なのでしょう？」

「う、うるさい！私は一人で無茶をするあやつに腹を立てているだけだ」

あの魔力の渦は確かにオーガのものだ。ということは――

「魔力が暴走しているのかもな……」

「大丈夫ですよ姫（笑）」

クララはダダをこねる子供を諭すように言う。子供扱いしおって

……。

「何がだ？」

「王子（仮）はバカですから、バカは死にませんよ」

「無責任なことを……」

それよりさっきから気になっておることがあるのだが――

「リュウ、起きておるのだろ？」

「バレていたのでござるか……」

「慧眼持ちの私を騙せると思ったのか？」

「フィア殿には敵いませんなぁ」

「で、どうなのだ？そなた、わざと負けたのであろう？」

「拙者にもいろいろあるのでござるよ」

適当にはぐらかすリュウに私は言った。

「そなたは一体何者なのだ？」

「……こうなったら白状するしかないでござるな」

あきらめたようにリュウは自分の素姓を明かした（？）。

「拙者は島国日和で王の首を狙い島流しされたのでござるよ」
前に会った時は濡れ衣と言っておったが、嘘だったのか。
「初対面の人に王の首を狙い島流しと言ったら警戒されると思いましてな」
まあ、確かに。
「面目ないでござる。拙者の身の上では嘘をつかざるおえなかったゆえ……」
「よい。それよりこの近くの村にドデカミンを連れていかねばならぬな」
オーガもあのような強敵と戦えばただでは済まんであろう。どこか落ち着いて治療できる場所を探さねばならぬな。
「むぅ……この道を真っすぐ行けば村があるな」
今までの村と違いかなり小さな村だがな。
「では、その村へ向かいましょう」
「こっちでござるか？」
声のした方を見るとリュウが明後日の方向に歩きだしていた。
「なぜそなたは真っすぐと言っておるのにそっちへ行くのだ……」

何だかんだ私たちは小さな農村に着き、村長に頼みこみ小屋を貸してもらった。

「御苦労であったな寿司麻呂」

「麻呂も役に立てて嬉しかったナリ」

ドデカミンを下した後リュウの使い魔の寿司麻呂はそう言って札に戻って行った。

「な、何だ！？魔獣か！？」

外で悲鳴が聞こえた。

「まさか……」

慌てて外に出てみると――

「フィア達は……ここ……かな」

「ヘブラス！」

ボロボロのオーガを乗せた魔魂召喚状態のヘブラスがいた。

「ああ、フィア。あいつは……オーガがぶっ飛ばし……た……よ」

ドサッ

「ヘブラス！？」

見ると魔魂召喚が解けたヘブラスもボロボロだった。

「と、とにかく2人を運ばなければ……。お、重い……」

私はヘブラスを抱えてオーガを背負って、小屋に入った。

「ふぅ、何とかベットまで運べたな……」

さすがに男一人背負って歩くのは無理があるな……。しかもオーガは服にもいろいろ仕込んでいるようだし……む、何か眠くなって――。

＊

「……さてと」

オーガ・ザントマン、ヘブラス・ガルムベルグ、リジー・サラマンダー。3人とも魔導傷を負っている、はやく浄化しないとな。

「……？CLEAN！？」

ポワワワーン

輝かしい光が3人を包む。

「……これでもう大丈夫だろう」

そして、いつものように消えようとした時――

「……んん～」

「……！？」

「……すぅ、すぅ……」

「……何だ、寝言か」

今度こそ僕はいつものようにその場から消えた。

「――はっ！？今誰かいたような……」

これからの旅はとても大変な旅になるだろう――

「気のせいか……」

――フィア・フロスト。

＊

「ん？」

俺が目を覚ますと見とことがない部屋にいた。

「ああ、ヘブラスが運んでくれたのか」

俺の寝ているベットのすぐ横でヘブラスは丸くなっていた。向こう側のベットにはリジーも寝ている。

「しっかし、魔導傷だらけなのに何で俺はこんなにぴんぴんしてるんだ？」

俺が首を捻っているとドアが開き、フィアが入って来た。

「オーガ！？傷はもうよいのか？」

「ああ、見ての通りだ。お前が治療してくれたのか？」

「それがよくわからんのだ。さっきちと居眠りしてしまってな、その時誰かいたような気がするのだが……」

まあ、よく考えればこいつの治癒魔法は爆発するしな。

「誰か来た……か」

ん、まさか――

「ちょっと出かけてくる！」
「お、おい！どこへ行くのだ！」
俺は慌てて小屋を飛び出した。
「待てよヴェンダ！」
俺は村を出て行こうとしている奴に呼びかけた。
「俺達を治療したのはお前だろ？」
「……まったくおとなしく寝てればいいものを。……君は本当に血の気が多いな」
ほっとけ。
「で、何で俺達を治療してくれたんだ？お前自分で俺のこと敵って言ってたじゃねぇか」
「……言ったよ、だけどそれ以上に君に興味が湧いたんだよ」
「俺に？でも敵だろ？」
「……言っただろ周りのことには干渉されないと」
ああ、言ってたなそんなこと。
「帝国の命令は無視ってわけか」

「……それも今回だけだ、次はこうはいかないだろう」

次会ったらヴェンダとも戦わなくちゃいけねぇってことか。

「まあ、とにかく助かった。ありがとな」

「……気にするな、それより君の連れのフィア・フロストのことだが――」

「オーガ！急にどうしたのだ？」

ヴェンダが何か言いかけたところでフィアが村の方から走って来た。

「っ！？……それじゃあ僕はこれで」

慌てて立ち去ろうとしているヴェンダに向かって俺はペットボトルを投げた。

「……これは？」

「ケフィアだ、結構うまいぞ。これで貸し借りは無しだな」

「……貸し借りねぇ……これで治療の借りを返されるとは思っても見なかったよ」

そう言ってヴェンダは苦笑した。そういやこいつの表情らいし表情は初めて見たな。

「気に入らなかったか？栄養満点でうめぇのに」

「……栄養か……僕には必要ないがまあいい。……最後に言っておく、魔王の力は少しでも油断すれば魔力が暴発して力に呑まれる。……鍛錬を怠らないことだね」

そう言い残すとヴェンダは消えてしまった。

「何なんだあいつは……」

「オーガ、誰と話しておったのだ？」

「んまあ、ちょっとな」

なんとなくだがヴェンダはフィアを避けてるみてぇだったからな。あまりフィアにヴェンダのことは言わねぇ方がいいだろう。

「むぅ……何か隠しておるな」

「ああ、隠してるぜ！」

「こやつ開き直りおった……」

仕方ねぇだろ。

「とにかく寝ておれ！そなたはまだ本調子ではないのであろう？」

「よーし、素振りでもするか！」

ヴェンダも鍛錬を怠るなて言ってたしな。

「人の話を聞けぇぇぇぇぇ！！！」

その後俺はぶっ倒れるまで素振りをしてフィアに2時間ぐらい説教される羽目になった……。

おまけコーナー【魔王子の紋章】

イビルゲイツ……大河アマゾネスに住む水生魔獣。見た目はワニのような感じで体長は2メートル前後。

デビルバイト……大河アマゾネスに住む水生魔獣。見た目はピラニアの様な感じで体長は２０ｃｍ前後。

劫熱ウナギ……大河アマゾネスに住む水生魔獣だが、非常に生息数が少なく滅多にお目にかかれないレアな魔獣。大河アマゾネスでオーガ達を襲ったがフィアの氷を食べて餌をくれたと勘違いし、フィアに懐いた。名前はキュルル、命名フィア。

クロップ……コボルト軍団のリーダーのサイクロプス。インディ村で黒い靄の影響で暴走していたところをオーガが倒し、助けた。正気に戻ってからは配達屋をやっている。

ジョーズ・インディ……インディ村の村長。冒険者のための村を代々守って来たインディ家の末裔。武器の目利きや人を見る目などが優れており、昔勇者を見たことがある。行き場を失っていたヘブラスに村の使い魔契約所の店長といういい場所を与えたり、使い魔契約所が魔族売買と大して変わらないことに心を痛めるなど優しい心の

持ち主である。

第九話　召喚魔導師ドゥルジ（後書き）

どうも、Ｌｅｎｂｉｒｄです！
今回もこの小説を読んで下さりありがとうございます！
最後の方に作ったオマケこーなーはいままで出た魔獣やサブキャラの紹介のこーなーです。

第１０話　枯れ果てた農村

「なるほど、それでこの村は農村なのにあまり食物が無いのでござるな」

「はい……」

俺がフィアに長々と説教された後、外に出てみるとリュウと村人が話し込んでいた。

「これはオーガ殿、フィア殿の説教は終わったのでござるか？」

「まあな、それより何の話をしてたんだ？」

「いえ、大したことではござらんよ。この村は農村と言うには余りにも食物が少ないうえに田畑も枯れているので気になって話を聞いていたのでござるよ」

「この村は昔はとても豊かな土地でした。しかし、１０年前ぐらいから土地が痩せ始めたのです」

１０年前っつーと――

「ちょうど戦争が起こった頃だな」

「戦争……でござるか？」

そういやリュウはあんまりこっちの大陸の事情は知らねぇんだったな。

「ああ、１０年前に帝国アルフヘイムの王であるウィリアム・アルフヘイムが裏切り者の魔王をとらえて、魔族にやられて衰退している妖精の国フロスト王国に攻め込んだってのが学校の教科書とかに載ってる戦争の概要だな」

まあ、ヘブラスの話を聞く限りでは勇者が国王の命令で魔王をとらえて魔族を騙して妖精に攻め込ませたんだろうがな。

「学校と言いますと日和でいう寺子屋ですな」

へぇ、日和では寺子屋って言うのか。

「学校か……」

俺がガキのころは帝都の魔法学園に通ってたな。

「オーガ殿は学校が好きなのでござるか？」

「まあ、俺は魔法学園の初等部しか卒業してねぇがな」

世間一般で言う小卒というやつだ。

「拙者は寺子屋は苦手でしたなぁ……と、それよりも――」

リュウは脱線した話を戻しつつ、村人に向き直った。

「小屋を貸して頂いたお礼をしたいのでござるが」

「お礼なんてとんでもない！困っている人を助けるのはあたりまえ

です！」

「では、こちらも困っている方をお助けいたしましょう」

そう言うとリュウはおもむろに懐から札を取りだした。

「もう一働きしてもらうでござるよ寿司麻呂――出でよ稲荷の神！」

「まったく主は式使いが荒いナリ……」

愚痴をこぼしつつ現れたのは小さいキツネの様な使い魔だった。

「拙者の使い魔の寿司麻呂でござるよ」

「はじめまして、オーガ殿。麻呂は主――虚原龍之介の式の寿司麻呂ナリ」

「式？」

どうもこの大陸と日和では言葉の食い違いがよく起こるな。魔法と術式、学校と寺子屋、んで式ってのは何だ？

「使い魔のことでござるよ」

ああ、なるほどな。

「話がまた脱線したな……お礼ってどうするんだ？」

俺達は特にこれと言ってお礼できるようなものは持ち合わせてはいない。しいて言うならケフィアぐらいか。

「この土地を過去のように豊かな土地に戻すのでござるよ」
土地を豊かに戻すだと？まあ、確かに肥料をやるとかいろいろ方法はあるっちゃあるが――
「いくらなんでも枯れた土地は元には戻らねぇだろ？」
「はっはっはオーガ殿、その返しは通販で主婦が言う『でもお高いんでしょ？』と同じでござるよ」
あー……確かにテレビの通販でよくそんなこと言ってるババアがいたな。
「オーガ殿は雷が落ちると土地が豊かになるということは知っているでござるか？」
そんなの聞いたことがねぇな。何てったって魔術的根拠がねぇしな。
「少なくとも魔法学園の初等部では習わなかったな」
「いや～恐らく高等部でも習わないかと」
「で、何で雷が落ちると土地が豊かになるんだ？」
「拙者も詳しいことはわからないのでござるが簡単に言うと雷が落ちると土に肥料となる物質が出るということらしいですぞ」
そりゃまた随分信憑性の薄い話だなおい。

「しかし、その本当かどうか怪しい話を裏付ける存在がいるのでござるよ」

そんな都合のいい存在がどこにいるんだよ――って！

「まさか、お前の使い魔？」

「大当たりナリ！」

俺が半信半疑で聞くと寿司麻呂は嬉しそうに答えた。

「稲荷の神とは豊作の神として日和では有名なのでござるが……まあ、この大陸では知られてなくとも仕方ありませんな。それで本題なのでござるが、豊作の神の稲荷の神は日和では稲荷神社という神社で祀られているのでござるよ」

何でそんな凄い奴がリュウの使い魔なんだよ。

「オーガ殿、なぜそんな胡散臭いものを見るような目で拙者を見るのでござるか？」

「気にするな」

「承知した。それでなぜ寿司麻呂が雷は土地を豊かにするという話の裏付けになるかといいますと――」

「麻呂の体内の波動は雷ナリ、これでわかるかの？」

波動ってことは魔力（マナ）か。人間にも魔族にも妖精にも量は違うが必

ず魔力はある、そしてその魔力にもそれぞれ適合属性ってのがあって、俺はあまり詳しくないんだがヘブラスだったら土、フィアだったら氷――まあ、あいつは妖精の姫だから適合とか関係なく色んな魔法を使えるだろうがな、リジーだったら――こいつは特例だが一応炎ということにしておこう。てか、特例多いな……それは置いといて、つまり体内の魔力が雷ってことは豊作の神と崇められる力の正体が雷ってことだな。

「だが、寿司麻呂が特別ってだけで雷が肥料のもとになるわけじゃねぇだろ？」

俺はまた通販ババアの『でもお高いんでしょ？』を繰り返してリュウに言った。

「オーガ殿、拙者が寿司麻呂を裏付けと判断したのはそれだけでは無いのでござるよ」

「どうゆうことだ？」

「稲荷神社だけだなく他の神社にもあるのでござるが、オーガ殿は注連縄（しめなわ）を知っておられるか？」

「注連縄か……ああ、あれだろ何か縄みたいなやつで……こう……何て言うか……」

「わからないのでしたら直接画像を見ていただいた方がわかりやすいですな」

そう言ってリュウはおもむろに袖からスマイルフォンを取りだした。

「あ、今月出た最新型じゃねぇか。てか、お前もスマフォ持ってたんだな」

「オーガ殿が携帯電話に詳しいとは以外でござるな」

ちなみになぜ俺が興味もないスマフォなどに詳しいかはフィアがよく使っているのを見ているからだ。ここ数日あいつはよくポツッターでいろいろとつぶいてたからな。確かインディ村で『インディ村なう』とかつぶやいてたな。

……もしかして敵に先回りされてんのはあいつのせいかもな。

「オーガ殿、これでござるよ」

俺が敵の襲撃の理由について考えている間にリュウはネットで注連縄の画像を検索し、俺に見せてきた。

「これが注連縄か……」

俺が画面を覗くとそこには太く編みこまれた縄にギザギザの白い紙が何本か垂れ下っているものの画像があった。

「この縄の太い部分が積乱雲、白い紙の部分が稲妻を表しているのでござるよ」

「なるほどな、つまり豊作の神として祀られた寿司麻呂とその祀られた神社を守る注連縄、この二つが合わさってはじめてあの胡散くせぇ話の裏付けってことか」

「その通りナリ」

まあ、こいつを見てるとこいつが日和の人間に祀られているのが不思議に思えてくるんだがな。

「結局どうするんだ？」

「麻呂だけでは波動が足りないナリよ？」

「拙者が手助けするので問題ないでござるよ、では拙者たちがこの土地を生き返らせますので……それでよろしいか？」

「ええ、出来るのでしたらこれ以上嬉しいことはありませんが……」

村人は半信半疑で言った。無理もない、俺だって半信半疑なんだからな。

「では行きますか」

「おう」

そして、俺達は村の中心の畑へ向かった。

「では、はじめるでござるよ寿司麻呂」

「うむ、了解ナリ？我豊穣の神、稲荷の神なり？」

シャーンと小気味良い鈴の音が聞こえ、寿司麻呂は魔魂召喚した時のヘブラス並みの大きさになり宙を舞い、畑に降り立った。

「？高天原よりこの地に降り立ちて、豊作をもたらしたまふ？」

シャーンと再び鈴の音が鳴る。そしてリュウも刀の柄に手をかけ足に雷を纏い、空中へ飛び上がった。

「拙者も行くでござるよ！迅雷歩？雷龍落とし！？」

「？我、豊穣の印に稲妻を落としはべり！？」

ザァァァァン！！！と最後に雷を落としてリュウと寿司麻呂は地面に降りてきた。

「ふぅ、麻呂は疲れた……もうよいかの？」

元の小さいキツネの姿に戻りつつ札に戻る寿司麻呂。

「拙者も少々魔力を使いすぎてしまいましたな」

いつも飄々としているリュウにしては珍しく、疲れているところを見るとこうゆう儀式は相当魔力を使うらしい。

「なぁリュウ、お前も魔力の適合属性は雷なのか？」

「そうでござるよ」

しかしどうにも気になることがある。

「おっかしいな……属性に雷ってあったか？」

俺が言うとリュウは一瞬眉をピクッと動かしたがいつも通り飄々

とした態度で言った。

「いや、雷属性は日和の人間特有のものなのでござるよ」

「へぇ、そうなのか……そういや俺全然リュウのこと知らねぇけど――」

俺はその先を言うことはできなかった。なぜなら――

「オーガ殿、申し訳ない……拙者は自分の素姓については話す気は無いのでござるよ」

――リュウが抜刀し俺の首筋に刀を突き付けていたからだ。

「……リュウ、お前」

「何でござるか？」

いつもと雰囲気が違うリュウに戸惑う俺だった。

「……ぷっ、あっはっはっは！」

「お、おい……」

突然笑い出したリュウにまたまた戸惑う俺だった。

「冗談でござるよ、驚いたでござるか？」

まったくこいつは……。

「お前、もう少し俺達を信用してくれてもいいだろうがよ」
「おや、信用していないのはフィア殿やリジー殿、そしてオーガど――」
「――俺はお前のこと信じてるよ」
俺はリュウの言葉を遮って言った。
「はっはっは、そう言ってくれるのはオーガ殿だけでござるよ」
リュウは笑った。だがその笑いはいつもと違って心底楽しそうだった。

＊

「むぅ……」
先ほどの戦いを思い出し私は首をかしげていた。
あのドゥルジという男、魔魂水晶に魔力が込められておらんかった。魔魂水晶は魔魂召喚をするときに複雑魔法陣と大量の魔力を使わなくて済むためにある物だ。それをわざわざ魔力を抜くなど本末転倒だ。
「む、待てよ……確かドデカミンは理性を飛ばすことでノーコスト

で魔法を使っておったな」

ここは本人に聞いてみるのが早いであろう。

「？ＩＣＥ！？」

ガッシャァァァァン！！！

「冷たっ！？」

ドデカミンは悲鳴を上げながらベットから飛び起きた。うむ、この様子なら怪我はもう大丈夫であろう。

「起きたか」

「いきなり何すんの！？」

「聞きたいことがある」

「……あんたさぁ～、ほんと自分勝手だよねぇ～……ま、いいや。それより聞きたいことって？」

「そなたの体内の魔魂水晶のことだ」

「うげっ」

体内の魔魂水晶という単語に反応し、顔を引き攣らせるリジー。
「私は体内に魔魂水晶があるなど甚(はなは)だ信じられんが、ドゥルジとの戦いでそなたは理性を飛ばすことによって詠唱なしで魔法を使っておったろ？」
詠唱なしの魔法。つまりそれは強力な魔力を持つ何かに体の主導権を渡すということだ。で、その強力な魔力を持つ何かと言えば四大妖精の魔魂水晶、魔王の力だ。
「あ、あれはねぇ～、その、何つ～かねぇ～……」
「本当にそなたはわかりやすいな」
「ただいまー」
そうこうしているうちにオーガが小屋に帰って来た。
「やっほ～お帰り～」
「その様子だと怪我はもういいみてぇだな。それより何の話してたんだ？」
「ドデカミンの――」
「――ケフィアの話だよぉ～」
オーガの質問に答える私の言葉を遮ってドデカミンが言った。なぜケフィアなのだ……？

「え、マジで？」

そしてそなたもなぜ食い付く？

「嘘を申す出ない！さっきまでそなたの――」

「もう、ケフィア要員は黙っててよぉ～！」

「何だその侮辱や嘲笑が混ざった呼び方は！」

大体何なのだそのケフィア要因とは！意味がわからぬぞ！

私が今まさにリジーに簡略魔法をリジーに放とうとしていると「……クララの野郎リジーにまで言いやがって……！」というオーガの呟きが聞こえてきたが私は頭に血が上っていたので内容はよく聞き取れなかった。

「つーかフィア、普段魔力節約とか言ってるくせにそう簡単に簡略魔法使っていいのか？」

どうやらオーガは私の魔力の心配をしておるようだが私は妖精の姫だ、問題はない！

「私の魔力は底なしだぞ？」

「じゃあ、普段から節約しなくていいだろうが……」

私は無言で魔法の照準をオーガに切り替える。

「ま、待て！落ち着けフィア！氷の魔法使いなんだから冷静になれ

！」

「魔法と性格は関係ない！？ＨＡＩＬＳＴＯＮＥ！？」

ドドドドド！！！

「痛でででっ！？」

むぅ……加減しすぎたか。

「まったく、ケフィアはオーガに対してやけに好戦的だよねぇ～」

どうやら私はケフィア要因どころかただのケフィアになったようだ。というかそれをそなたが言うのか、そなたが。

「誰がケフィアだ！ケは余計だ！私の名はフィア、フィア・フロストだ！飲み物のような名で呼ぶな！」

「それをあんたが言うか！？あたしだってドデカミンなんて飲み物みてぇな名前じゃなくてリジー・サラマンダーって名前があるんだよ！」

「普段私をチビ呼ばわりしておるくせにえばって言うな！」

「だってチビじゃん」

「うぐっ、四捨五入すれば１５０ｃｍはあるのだ！」

痛いところをつかれ何とか見栄を張ろうとするがそうはドデカミンが卸(おろ)さない。

「で、何ｃｍよ？」

「ひゃ、１４……」

「え、何て言ったの？」

ニヤニヤしながら聞き返すドデカミン。ええいむかつく奴だ！

「１４８ｃｍだ！」

半ばやけくそで叫んだ私にドデカミンはわざとらしい哀れみの目を向けて言った。

「小学生の平均身長って確か――」

「――言うな！」

それを言われたらいろいろと私の中で――

「１４８ｃｍだったよな」

ガラガラガッシャァァン！！！

――何かが崩れ落ちる音がした。

「……え、俺なんか地雷踏んだか？」

「そ～だね、それも地雷原に全身にダイナマイト巻いてパラシュート無しでスカイダイビングして突っ込むくらいの勢いでね」

「……オーガ」

私はそっとオーガの肩に手を置く。

「？ＨＡＩＬＳＴＯＮＥ！？」

ドドドドド！！！

＊

「まったく……氷属性の魔法はもう懲り懲りだ」

俺は凍りついた体をリジーの炎で解凍しながら呟いた。

「何を言っておるのだ？」

「何がって何だよ？」

フィアはバカを見る様な目で俺を見た後、溜め息をつきながら魔法について説明し始めた。

「氷属性などないぞ、あるのは炎属性、水属性、風属性、土属性の四つだけだ」

「え、じゃあお前の魔法は？」

氷属性がねぇんならどうやって氷魔法を使うんだよ。

「はあぁぁぁぁぁぁ……詳しく説明するからよく聞いておれ」

――というわけで

「ちびっ子先生のよくわかる魔法講座！」

「わー（パチパチパチパチ）」

リジーの訳のわからんノリに合わせてわざとらしい掛け声と取ってつけた拍手をする俺。フィアはそんな俺達を一瞥し、魔法の基礎について話し始めた。

「……では説明するぞ、まず属性は四種類あり炎、水、風、土、それぞれ四大妖精に対応した属性がある」

「は～い先生！質問でぇ～す」

「……何だ？」

リジーが質問した途端物凄い殺視線を向けるフィア。うーん、フィアは見た目は全然怖くねぇのに何でこう目つきが怖いんだ？

「四大妖精と四属性どっちが先に生まれたんですかぁ～？」

う、うぜぇ……。

「……で、私の魔法が何で氷魔法なのかと言うとだな」

「ガンスルー！？」

まあ、こうゆう時は無視が一番だな。

「人間、妖精、魔族、種族を問わず必ず人それぞれに魔力の属性というものが存在する。だが、中には複数の属性を持つものがいてその属性の組み合わせによって炎、水、風、土以外の魔法を作ることが出来るのだ」

組み合わせってことは――

「フィアの氷魔法は何の組み合わせなんだ？」

「む、水と風と炎だが？」

「ほとんどじゃねぇか！？」

てか、え、何こいつ。どんだけ属性複合してんだよ！

「ちなみにあたしは炎オンリ〜だよ〜」

「「それは知ってる」」

「……ぶ〜」

「それより複合属性ってどのくらい珍しいんだ？」

フィアの話を聞く限りでは結構そうゆう四属性以外のものはありふれている気がするんだが。

「私も明確な数値は知らないが確か二重属性（デュアルマナ）で全世界で２０％三重属性（トリプルマナ）で１％全属性をもつものはいないと言われている」

今さらっと凄いこと言わなかったかこいつ？

「ちなみにお前は？」

「私は三重属性だが」

「超レアじゃねぇか！？」

こいつ意外と大物なのかもな。

「だが普通に複合魔法を使っている奴はわんさかいるぞ。そいつらはどうやってるんだ？」

「確かに複数の属性を体内に持つ者は限られておるが武器や装備に自分の持つ魔力とか違う属性のものをあわせてことで簡単に複合魔法が発動できるのだ」

「なるほどな。ちなみにお前は？」
「全て体内で魔力を合わせて使っておるが？」
やっぱりこいつはすげぇ……。
「言っとくけど～あたしのが炎属性の純度は上だからねぇ～！」
突然リジーがそんなことを言いだした。
「純度？」
俺が首を傾げているとフィアが補足説明してくれた。
「属性には純度という者があってだな、まあいかに強い攻撃ができるとかその程度に考えておればよいであろう。ちなみに大抵の場合複合属性の者はメインの属性がありサブの属性で微弱なものというのが一般的だ」
何て言うかこれはもうお約束だと思うが……。
「フィアのメインとサブの属性は何だ？」
「私はメインが水属性と風属性でサブが炎属性だが？」
「……やっぱりお前凄いわ」
「べ、別に凄くなどない！たまたまだ！」

そう言いつつポニーテールの先っぽをいじるフィア。まあ、確かにたまたまだわな。

「けっ、チビの氷魔法なんかあたしの炎に比べれば大したことないって～の」

そして横でやさぐれているリジー。何て言うかこいつ俺より強ぇはずなのに連戦連敗状態だからなぁ……。まあ、そんなこといったらフィアは戦ってすらいねぇんだがな。

「ほう……ならばやるか？」

「やってやろうじゃねぇ～の！」

今にも簡略魔法を放ちそうな勢いでバチバチと火花を散らす2人。

「おい、小屋の中ではじめようとするんじゃねぇ！」

「？ＩＣＥ！？」

「？ＦＬＡＭＥ！？」

俺の嘆きも虚しく魔法を放つバカ2人。

「だあぁぁやめろぉぉぉぉ！？」

結局いつも俺がひどい目に会うんだよな……。

＊

「……おい、いつまで寝ているつもりだ？」

僕はもはや地形が原形を残していない街道で一際大きく抉られたような場所に横たわっている男――ドゥルジを叩き起した。

「がはっ！？」

「……起きたか？」

「ヴェ、ヴェンダ！？待ってくれ！違うんだ、これは――」

「……言い訳無用だよ」

怯えながら必死で自分の保身に走るヴェンダの言葉を遮り言う。

「……父さんはまだ君の失態を知らない、これがどうゆうことだかわかるかい？」

「助かる！」

そう言いい、すぐにでも出発しそうなドゥルジを引きとめる。

「……その体で返り討ちにされに行く気かい？」

「うるせぇ！」

……逆切れか。もともと短気なドゥルジのことだ、いた仕方ない。

「……これはおまけだよ？ＲＥＣＯＶＥＲ！？」

ポワワーンと光がドゥルジの体を包む、そしてドゥルジの体からは傷らしい傷は消えた。

「悪ぃな、今度こそ奴らを地獄に叩き落としてやる！」

意気込んで猛ダッシュで走り去るドゥルジ、まあ――

「……次失敗したらどうなるかはわかってるみたいだね」

――次失敗したら命は無いからね。

第１０話　枯れ果てた農村（後書き）

どうもＬｅｎｂｉｒｄです！
最近は忙しくてなかなか小説の方が進みません。
今回も読んで下さりありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8950v/

魔王子は世界を救い勇者となる

2011年10月23日15時01分発行